歌仙家集　六

特40-159
1200800193462
特40
159
255
268
始

各集解題

信明集
作者は四位陸奥守源信明（サネアキラ）、後撰以下の作者

元眞集
五位丹波介藤原元眞、後拾遺集以下の作者

仲文集
俳諧めきたる歌多く外の集と同日に論ずべからず藤原仲文後の名は國茂、五位上野介、拾遺以下の作者

忠見集
壬生忠見は忠岑の子、六位攝津守、後撰以下の作者

中務集

明治 42 9 1 内交

中務（ナカツカサ）は伊勢の女、後撰以下の作者

信明集

亭子院うせさせたまひつる御ふくにて

去年のはるえたにて折りし藤の花ころもにきんされもひけんやは

またの年御はてに

ふる里のこするゑの紅葉あきはて〻たのかちり〳〵なるかわひしさ

むらかみの御時に國々の名たかきところ〳〵を御屏風の繪にか〻せ給ひてこの歌つかうまつれされほせ言あるにたてまつる

春日野

春日野ののもりさ身をもなしてしか待つらん春をわかものさみん

御熊野

うきことも山道しらすたつねこしわかみくま野に入りやしなまし

長柄橋

こゝろたになからの橋はなからへん我身にひとはたとへさるへく

難波

我こひはなにはのあしのうらなれや浪のよる〳〵そよときゝつゝ

須磨

としをへてもしほのみやく須磨の浦にたえぬ思ひを人知るらめや

渚岡

うちつけになきさの岡のまつ風をそらにもなみのたつかときく

佐保山

さほ山のはゝそのもみちちりにけりこひしき人をまつとせしまに

田子浦

わかこひはなくさめかねつ駿河なる田子の浦なみやむときもなく

しかすかの渡

ゆけときぬくれとこまらぬ旅人はたゝふしかすかのわたりなりけり

つくま山

年をへてきみにこゝろをつくまや〔はイ〕まみねは雲ゐにたれもひやるかな

しら山

新歌 むかしより名にふりつめる白山のくもゐのゆきはきゆるよもなし

ふたこ山

なかきよにきみとふたこの山のねはあくとも知らぬあさ〔きイ〕霧そたつ

吉野山

ゆく年のこえてはすきぬよしの山いくよろつ代のつもりなるらん

あさかの沼

花かつみかつみる人のこゝろさへあさかのぬまになるそわひしき

なこその關

なこそせきなこその關はゆきかふ人もこかめす名のみなりけり

こゝ御屛風の繪にもみちちりたるをみる人々

新古 ほの〳〵とありあけのつきの月影に紅葉ふきたろす山たろしの風

朱雀院のわか宮御もきの御屛風の繪に梅の花山さと

の家にある所

色も香もまつわかやとのうめをこそこゝろ知れらん人は見にこめ

たなしこゝろ雪ふる

ふる雪のしたにゝほへる梅のはなしのひにはるのいろそ見えける

たなし花折る女を男見る

うめのはなをる袂をも見つるかな香をたつねてもとはんこそ思ふ

初雁

まつ人にいかてつけまし雲の上にほのかにきこゆはつかりのこゑ

もみち葉のたちそはりぬる瀧つ瀬は秋のふかさそそこに見えける

内裏の御屛風の繪にねのひもたるところ

ゆきかへる野邊にこたかき姫小松これも子の日のふたはなりけり

子の日してかへる家路のはる〳〵とゆくさき遠くたもほゆるかな

天暦八年中宮七十賀御屛風のれうの和歌

わたつみのなきさの岡

わたつみのなきさの岡の花すゝきまねきそよするたきつしらなみ

吉野山

よしのやま雪にはあともたえにしをかすみそ春のしるしなりける

おほあらきの森

ほとゝきす来なくをきけはおほあらきの森こそ夏のやとりなるらし

浮島

うきこともきこえぬものをうき島は所たかへの名にこそありけれ

磯上

年をへていひふるさるゝ磯のかみ名をたにかへて世をへてしかな

伏見の里

ゆく春にふしみの里とつけてしかあはまくほしみたちやとまると

高砂

すむ鹿のなかぬときさへあやなく(しィ)も聲たかさこときゝわたるかな

秋の夜のあかつきかたのつき見れはをはすて山そおもひやらるゝ

こゆるきの磯

風ふけはたまもりいたすしら波のよせみともなくこゆるきのいそ(さとィ)

またこと御屏風三月

うくひすのなきかへるねをしるへにて春の行へをしるよしもかな

六月

みなかみにはらへてなかす言の葉をゝりなかくしそ瀬々のしら波

あしのねの生ふるあら田をうちかへししたにそおもふ心(よはィ)あるらし

紅葉

あちきなく思ひこそやれたなはたのまれにあふらん夜のしたひも

紅葉のちり殘りたる山の峰に月の入りたるところ

ちりぬへき紅葉のいろもつきかけも山のはにこそとまらさりけれ

紅葉をるをりもかはらていつのまにふりしきぬらん峰のしらゆき

けふをしる菊のこゝろもうへなれやさやかに見えつ今朝のはつ霜
あられふるみわの山邊のさかき葉にゆふかけてこそくれは歸らめ
　しかの山こえしたる所
我たにもけふめつらしく見る山にあまたのとしのこえにけるかな
山路にはたえて水たになかりせはいとゝなみたそそほちまさまし
そほつとも こゝにくらさん山の井にこひしき人のかけや見ゆると
　朱雀院うせさせ給ひてける時
かなしさの月日にそへていまよりは我身ひとつにとまるへきかな
　御いみはてゝ人々いてける日
しくれつゝこすゑはこゝにうつるとも露にわすれし秋はわすれし
　式部卿宮出家し給ひける時御とふらひにをのゝ宮殿
　まゐり給へるに御あるしなとあるついてに

うれしきもあはれもふかき春なれはわかれかたくも見ゆるけふ哉
　敦慶のみこのむすめに
年ふれはわすれやせんとおもふこそあひ見ぬよりも我はわひしき
　返し
なからへんいのちそ知らぬわすれしとおもふ心は身にそはりつゝ
うしとおもふ心のこゆるまつ山はたのめしかひもなくそおほゆる
　返し
秋といへといろもかはらぬまつ山はたつとも浪のこえんものかは
こりすまにたゆるまもなき水莖のなく〳〵かけるふみにそ有ける
　をとこ
　またをとこのかへりて
ちはやふるかものあふひを祈りつゝかさして君をたのみけるかな

千はやふるかもの葵をかくるよりいとゝうきてもたもほゆるかな
をとこ
かみよよりいむといふなる五月雨のこなたに人を見るよしもかな
返し
五月雨のこなたかなたもあふことはいつもいむとそ人はいふなる
また返し
いつこにも思ひもいらむよとゝもにいまぬたえまの中もなにかは
をとこ
こよひねてあふみへゆくと見し夢のかなしと袖にふるはなみたか
返し
ほともなくやみぬる雨にたとふるはいかに悲しきなみたなるらん

かきりなくかなしと人を思ふには物たもひますものにそありける
さみたれはきみにやありけん郭公ひと知れぬ音をこゝらなきつる
返し
いかてかはきゝとかめつるほとゝきす人知れすこそ音をはなきつれ
をとこ
人やりにあらぬことにもあらなくに身もいたつらになりぬへき哉
返し
身をすてゝ思ふと見しはいたつらになるへき事にかこたれもせん
又男
いつはりをたれならはして限なきわかまことをもうたかはすらん
かへし
よのひとのたなし心にあらはこそみなたしなへていつはりもせめ

また返し

たまさかにまことやすると君ならぬ人して世をもしらせてしかな

また

身のうへにひとの心も知らぬまはことそともなき音をのみそなく

返し

君たにもことそともなき涙をはいかに知りてかあはれこれもはん

また

あくるまてと思ふ時たにあるものをなく〳〵とくもかへるへき哉

かへし

わかれもふ心もまたきかへるまもふかくはあらぬ中にそありける

今日のうちに否ともうともいひはてよ人頼めなることなせられそ

返し

いまといひてかりの心も見るへきをかひなき人にたのめつるかな

又

かくなむと人知るらめやゆく道もこゝろとゝめてたもほゆるかな

返し

ゆくみちにとまらはとまれしるとてもやるへきことの心ならねは

また

早くこのかみの十日もすきなゝむはつかにてたにみそかなりやと

返し

はつかにてみそなゝむともたほゝえす後やよそかにならんと思へは

また

なみたとも雨ともわかす大かたにわれはふるとそひとは見るらん

かへし

涙ともしらぬさきよりうへこそはつねよりとくもなかめられけれ
又返し
知らねともたなし心になかめけることはかりをそあはれとはきく
また
ちきりけむ日をもすくさし七夕はわかことかくやたもひさりけん
返し
七夕のちきりけん日はすくすともたとふへしやはこともゆゝしく
また返し
ゆゝしとも思はさりけりたなはたは忘れぬなかのあらまほしさに
又
かすならぬ心のうちにいとゝしくそらさへゆるすところのわひしさ
我をこそ世に見くるしくたもひしか人はいかなるこゝろなるらん

また返し
あひもみすことをはいはん方もなしたかつけそめしやまひなるらん
かひもなききみによりつゝくたくれは心もなくもなりぬへきかな
また
うさまさるわか身もしらてよそにのみきゝし昔にかへしてしかな
たのむることなくはしぬへしといひたる返事にをん
な
後 いたつらにたひ〱ことに死ぬといへはあふには何をかへんとすらん
返し
後 しぬ〱ときく〱たにもあひ見ねは命をいつのためにのこさん
後 はしめてのつとめてかへりたる女
後 はかなくてたなし心になりにしをたもふかことくたもふらんやは

かへし

後　わひしさをたなしこゝろときくからに我身をすてゝ君そかなしき

ちかつきてをとこ

よすきゝそかせもすゝしくふくころは心ことにてまたしとやする

また

なみたかく松のかゝれるよにやあらん頼めてゆくそたひかすといふ

返し

すゑの山むかしよりまつ君をたきて浪たかくともこさしとそ思ふ

かゝみかりてかへすとてしきのしたにかきつくをと

こ

あふきのわかれはをしのかゝみかもたもかけにのみ人のみゆらん

人のゆるさぬ中にやありけんをとこ

そめて思ふいろはふかきをくちなしのいはれぬ色と人やみるらん

いきたるにあはねは

後　あたら夜の月と花とをたなしくはあはれ知れらんひとに見せはや、

返し

古　きみならてたれにか見せん梅の花いろをも香をもしるひとそ知る

うちへいそきまゐりたるつとめて女

いそきけん心のうちを知らぬかなもしもゝしきにとこやさたむる

かへしあるへしとか

また女

ありしよりつらき所もまさらなむかひなきよりはたえてやみなん

山里にあるに女もさてあるに

わかことやひともいふらん山里はこゝろほそさそすみうかりける

わなし女のふくなる頃たえまかちなるを恨みて
なき人もあるかつらきをわもふにも色わかれぬはなみたなりけり
　わなしころいきてたゝくにあけねはをとこ
しのゝめのあけさりしかは夜もすからまきのとよりは立歸りにし
返し
夏の夜もまきの板戸もいたつらにあけてくやしくわもほゆるかな
　たえてのちきゝたるにかゝみをいたしたれはをとこ
あけに見しかけめつらしきます鏡ふたよりみよりねこそなかるれ
　かへし
こゝろからみさりし影はますかゝみみよりなくとも今はかひなし
　わなしころ女
思ひやるこゝろもかくもわくれぬる野にも山にもゆくと見えつゝ

返し
よとゝもにまとふこゝろや人目には野にも山にもゆくとみゆらん
　こと人にかよふときゝてをとこ
年をへてわれこそしたにすみの江の松をはひとのうへときゝつゝ
　返し
心にもあらてうき世にすみの江のとしふるまつそ見ぬはくるしき
　女小野宮にまゐりてかりをきゝつけてさふらひにゐ
　て月のあかき夜人していひやる
戀しさはわなしこゝろにあらすともこよひの月をきみみさらめや
　返しなかつかさ
さやかにも見るへきものを我はたゝなみたにくもる折そわほかる（つきィ）
　行平か三君をたえたるころ女

わひつゝもこのよは經なんわたり川のちの淵瀬とたれにとはまし
此世をはたひもかつきてわたしてん後ははしめのひとをたつねよ
ころいかてあはんなといひてたこせたる
からくしてをしみとめたる命もてあふことをさへやまんとやする
もろともにいさとはいはてしての山いかてかひとりこえむとはせし
めて
あかつきになくゆふつけの我聲にたとらぬ音をそなきてかへりし
返し

あかつきのねさめのみゝにきゝしかは鳥より外のこゑはせさりき
人のふみを得てかくせは女のうらむれはふみのうら
にかきて見する
みれはかくうらみところもなき物をうしろめたくは思はさらなん
秋ごたにたもはきりせは人知れすもくるゝことをなにゝつけまし
いひそめぬほとは中々ありにしをしつこゝろなきのふけふかな
返事にかみをつゝみてたこせたれは
わりなくてやみやしなんとわひつるに助くるかみをみるかうれしさ
また知らすまとふ心にいとゝしくたほつかなきはわひしかりけり
かへりことにみえすかきをしてたこせたれは
わひしきに戀にまとへる心にはそのことゝしも見えすそありける

ほともなくきえぬへき世に白露のつらかりきとなおもひおかれそ
おとなしの山よりいつる水なれやおほつかなくもなかれゆくかな
なか〳〵におほつかなさの夢ならはあはする人もありもしなまし
人知れぬおもひをすれはあき萩の下葉こかるゝものにそありける
露はおけとわかをるやとの萩か枝はかくこそあきを知らす顔なれ

　　たいふのきみといふ人にいひやる

思ふことありて久しくなりぬとはきくかきかぬか知りて知らぬか

　　右大辨なくなり給ひて人々いみにこもりてある程に

ものをのみおもふねさめの枕にはなみたかゝらぬあかつきそなき

　　おとうとのもとにひさしくあはぬころ

手すさひにひをけのおきやわりてけん戀しき人にあはぬころかな

　　五月のせちにやあらんたいたしかにしらす

かたきなく思へるこまにくらふれは身にそふ影はおくれさりけり
年ことに名をたにかへはよのつねの櫻とのみはいはすそあらまし

　　そてといふ女つかひたる人にその女につけていふ

人知れぬわかものおもひの涙をはそてにつけてそ見すへかりける

　　二三日はかりあはぬ女に

思ひきやあひ見ぬほとをいつなりと数ふはかりにならんものとは

　　堀河のおとゝの宮の権太夫ときこえし時みちの國よ
　　りきこゆる

あけくれはまかきのしまをなかめつゝ都こひしき音をのみそなく

　　大別松といふ人の出家したるをいひやる

いかにしてきみかこゝろにたちつらむ小松の山のすみそめのくも

しれたりといはれたる人のこしのしりにたちてはし
りけるを見て人々のかれを題にて歌よまんといひけ
れは

あらうしのしたしの浦のゆかしさにとりて見つれははしかれにけり

はせをは長谷寺やけたりときくころ

世の中のたのみところにせし物をはせをはかくややかんと思ひし

中勢に忍ひて物いふよ郭公のなくをきゝて

こよひこそしてのたをさもきゝつらめ今は五月のそちに知られん

かへし女

ほとゝきすきゝわたるとも五月雨のそらことにたに人のなさなん

しるや君しらすはいかにつらからんわかかくはかり思ふこゝろを

みるめゆゑあまにゝたれと女郎花けふはわれにそかつきたとされる

御しやうしのゑにふかき山にうくひすの聲をきく人
あり

うくひすのなく音をきけは山ふか(ちィ)み我よりさきにはるは來にけり

元眞集

朱雀院御屛風に正月一日

あらたまの年をたくりてふる雪にはるとも見えてけふのくれぬる

中春池のほとりに山吹さくらさけり女すたれを上
けてたてり

わかやとのやへ山吹はちりぬへしはなのさかりをひとのみにこぬ

さくらの花のもとに人々あそふ

はる風もこゝしはかりはさくら花ひとのこゝろにまかせたらなん

たうゑのころ

淺みとり野邊のあら田をうちかへしせなか（けなかきィ）に秋をまちやくらさん

くれの春池のほとりに藤の花さける所に人々あそふ

きしちかき松にかゝれる藤のはななみさへをりてかへるめるかな
たなし花咲けるわたり

藤のはなさけるわたりを漕く船のよそにてなみはたもひかけなん
みつのわのたり（あやイ）ゐることにみたるゝはいけの芦鶴たえぬなるへし

はしめの夏郭公

まつ人はあまたありともたちとまり山ほとゝきすふたこゑとなけ

中夏五月五日

駒なへてすさめぬ澤のあやめくさ今日にあはすはなほやからまし

七月七日

ひとゝせにひと夜にこめて七夕のあきはこよひのつきひならぬか

はつ雁をきく

はつ雁をたくるなりけりあさ（きイ）風のくもゐはるかにふきてすくるは

中秋十五夜

しらつゆのたける草葉にうかはすは今宵のつきを（はイ）ひるとこそみめ

田かるところ

秋の野をたちいてゝ見れはあしひきのやまの錦にたさらさりけり

はしめの冬あしろのうへにたきなをり

わか宿にあるへきものを此たひのあしろによりてひをもふるかな

雪みるところ

たほ空にはるとも見えてちる花のくものうへ（をイ）にてたつねてしかな

十二月つこもり

いたつらにすくる月日はたほかれと今日しもつもる年をこそ思へ

れなし十二月春宮女御ふちつほの御つほねにてちゝ
の御五十賀うちにせさせ給ひしに其御屏風さうし（宣旨イ）に
てたてまつるはしめの春をこゝ女かたをかの水の
ほとりにてあそふ

ねのひする山田の水のかけしあれはちとせのまつはひかてみえけり

梅花あるところに人あそふ

やま風にまかするよりは梅の花にほひのやとにつきすもあるかな

松に藤のかゝれるところ

はるふかみ咲きてにほへる藤の花まつそちとせのやとりなりける

人の家の花橘にほとゝきすなく

よになれぬたゝひと聲もほとゝきす花たちはなにかくれてそなく

たきあるところに

山たかみおちくる瀧のしらいとはそらにみたるゝたまかとそ見る

池のほとりにつるたてり

あしたつの千代のかけすむ池水はなみたてれとものとけかりけり

れなし題

みなそこにしつめるちよの影をみて池のあしたつのとけかりけり

かしら白きたきなある所に雪ふる

年ふかきいろこし見れはしら雪のふるにもれのかうへをこそ思へ

人の家にたけあるところ

まちかきさきはのかけはくれ竹のよをへて深きみとりなりけり

れなしうちのみさうしの繪に女宮のつけさせ給ひけ
る女いなりにまうてたるところ

ちはやふる神のやしろにいのりくる道のほとさへたもなれにけり

よしの川にくれくたすこころ

よし野川たろすいかたのをりこごにたもひもよらす浪（やまィ）のこゝろを

廣澤の池のほとりに女ともねぬなはくる

ひろさはの池のねぬなはくりよする○○○○○○○○○○○○

さかみのあしからの關にたひ人ゆく

あしからの山にしけれるたまこすけゆきかふ駒もすさめさりけり

いてはのやそしまに舟にのりて人あそふ

やそしまの浦のなきさにかそへつゝこまれる年もあまたへぬへし

みちの國のあさかの沼のほとりに京よりくたれる人たちとまれり

たことにきくあさかの沼の朝ほらけたえぬけふりは名のみなりけり

屏風の繪に柳たほかる色はかすかにてあり（ところせとのいへにかすかにてありィ）

あをやきのいとによりくる年（てそィ）をへて（ふるィ）うき世そむけは（るィ）跡もたちける

旅人みちゆくにさくらの花ちる

いつもかこゆく古里のさくらはなわれたに見てののちに散らなん

題たなし

ゆくてたにいかてとく見んわか宿のさくらはけふの風にのこらし

郭公

ほとゝきす去年のはつ聲（ひとィ）あかさりし人のきくかに（かくィ）まつもなかなん

さくらさきたる家に女見いたしたり

わかやとに咲きにし日より櫻花かくこそは見めあかすもあるかな

又

我やとのさくらは風にちりはてぬあすこんひとやくやしと思はん

山里に梅さける家にをとこまらうとうまよりたり

てたてり

しる人もなきやまさとの梅のはなにほふ日よりそきてもたつぬる

卯月のついたちにいまたよそなる女に

けふよりはきてもすきなんなつ衣みるよりうすきこゝろこや見ん

返し

かけてたにいふこそうけれ夏衣あるよりまさむうすさこれもへは

をとこ

あはてふるほとにぬれたるから衣けふは身さへもなかるへきかな

返し

たほ空にふりてぬるさもぬれ衣をほしてもわふるころのなかめか

をとこ

うれたかみなくね空なるほとゝきすたとにききてや夏をすくらむ

五月五日たなし人

あやめ草ねもころみてあふことをいつかとまちしけふは暮しつ

返し

まちきけるけふすきぬれはあやみ草いまは五月もあらしとそ思ふ

さてのあしたにをとこ

いたにねすなりにし物をあふことの夢かとのみもたもほゆるかな

えあはてかへりて男

ねさめにて夜はあけぬめりほとゝきすことかたらはん一聲もせす

返し

あやしさにねさめてきけはほとゝきすなと故郷にこゑもきこえぬ

をのゝ宮の御物いみにききかたらひしこたちに

をみなへしにつけて

うつろはぬほどたにもみん女郎花こゝろのどかにつゆはたかなん

同年前栽あはせに神無月を題にて

かみなつきしくるゝ空のもみち葉は秋をたむくるぬさとちりけり

すきにし秋ををしむ

霧たちてわかれし日よりしくれつゝすきにし秋そこひしかりける

紅葉ををしむ

あききりのたゝぬさきにもさほ山の紅葉のにしきのこらさりけり

神無月といふこゝろを

ちりはてゝ木の葉も空にのこらぬを神無月とはいふにそありける

又

かりかねは霜とともにやたきてくるしくるゝ空になくこゑのする

きくの花ををしむ

年ふかきいろとしりてははつしものゝこしたきけむしら菊のはな

二條式部卿の御たとゝの六十賀きたのかたのし給ふ

御屛風の歌　松原のあひたにみななきさに出て人あり

日をふれと松のはまへにある船はちとせを見んといてぬなるへし

ゐなかの家の前に河ありそれにかはかめながる

かはかめも今よろつ代はもろともに浪のそこにてすみそわたらん

大將殿の女御のなてしこあはせに

もとしきにうつしうゑてそ常夏によをへてたえぬいろを見るへき（もイ）

山かつのかきねをせはみ生ひそめし色とはみゆやなてしこのはな

天徳三年九月十六（八イ）日かうしんに中宮の女房歌合せん

といふによめる　庚申

難波かた漕けこをふねはあしわかのえさるほとこそ久しかりけれ

　花すゝき

つきかけにほのかに見ゆる花すゝき風のたよりにむすひつるかな

　萩

たかさこの尾上のはきを折りつれは鹿のたちとやうすくなるらん

　女郎花

新古

をみなへし野邊のふるさとおもひいてゝ宿りし蟲の聲やこひしき

　きり〳〵す

露むすふあきはてかたのきり〳〵す草のねとこにさむくこそなけ

　ひくらし

あき風のはきの下葉をふきみたるそらにみちぬる日くらしのこゑ

　まつむし

まつ蟲のたえすなくなるをみなへしちとせの秋はたのもしきかな

れなし八月二十三日女御の前栽あはせの蟲のうた

人知れすあきのくれぬるをみなへし蟲の音よりもたつねつるかな

　花すゝき

秋くれてまねくたもとをはなすゝきいまは露さへむすふつきかな

　萩

をきの葉に風のすゝしき秋きてはくれにあやしき物をこそれもへ

　らに

むさし野の草のゆかりに藤はかまわかむらさきにそめてにほへる

　なてしこ

露むすふかせはふくともとこなつの花のさかりに見ゆるあきかな

　きくの花

こゝろよりうつろふいろを今朝はまたなん
たつた山ふかきもみちも君みすはよるのにしきこなほそくれまし

紅葉

れなし年二月三日うちの御歌合にかた〳〵のをよめる

霞

右方れなし題

よし野山かすみたちぬる今日よりやあしたの原にわか菜つむらん

左方

春かすみたちやどり（めィ）つるをくら山れこはのかひにゆきも見えぬは

れなし

けふより（さィ）はかすみやまへにたちのほり三輪の古郷ほのかにそ見る

冬ならてけふはかりにや春かすみたなひくそらのこゝに見ゆらん

人のれう

鶯

春きぬこまつらん（ちつけィ）かほにうくひすの木たかき枝にふりいてつゝなく

又右のれう

はるはなほをしみつゝなくうくひすの聲に雲居もにほふへらなり

左

柳

あさみとりみたれてなひく青柳のいろにそはるのかせは見えける

又右

あをやきの糸にはふしそなからまし風のくるにもみたれさるへく

又さくら

さきさかすつけよよし野のやま櫻かすみはれなはよそにても見ん

左

よこゝもにちらすもあらなん櫻花あかぬこゝろはいつかたゆへき

右山吹

ちるまてもたのもしきかな山吹のやへをつくさんほこもありやこ
たなしかたに

はなさかりやへ山吹ををりつれは井手のかはつの音にやなくらん

左藤

もろこもに千代はつきなん藤の花まつにかゝらぬはるしなけれは

右

こきはなる松にかゝれるふちなみの花たにちるなはるのなこりに

左くれのはる

あすたにもくるへきはるにあらはこそ心のこかにけふををしまめ

右卯花

さきにけりわかやまさこの卯の花はかきねにきえぬ雪こみるまて

左

しろたへにさける卯の花やみならは月こや見ましいもかかきねは

人のれうに郭公

初こゑのよはにきこゆるほこゝきすわかこゝ人もまちやしつらん

右のれう

夏の夜のみしかきよりもほこゝきすまたふた聲こなかてゆくらん

たなしかたのれうに夏草

なつ草のしけきにあこも見えぬかな野中ふるみちいつれこもなく

右

新古 なつ草はしけりにけりなたまほこのみちゆき人のむ〔もイ〕すふはかりに

たなし方のれうこひ

戀しさのわすられぬへき物ならはなにしかいける身をもうらみん

右

君こひてあふとみる夜のあかつきは夢にうれしきかひなかりけり

わかむねのたえすもゆるを忍ふかな人にいふへき中にしあらねは

右

君こふとかつはきえつゝふる程をかくてもいける身とや見るらん

うちとけていをたにねゝはあふ事は夢路をさへそへたてはてつる

たまのをのたえてみたるゝ我戀にいとゝなみたそたちそはりける

こひわひてたえす涙のもれけれはつひにみくつとなをやなかさん

なつ山のしけきたもひはふりはへてしけらぬほとに道まよひけり

ゆめにたにあふと見る夜のあかつきはたつる涙のかけそはりけり

春つくしにて歌よみあまたしてよむにあまつゝみと

いふところを十二にて

須摩のあまのつゝみて底をかつかねはふかき玉藻もみえぬなりけり

つく〳〵しを十三にて

雲かゝるそらにこきつくつくし船いつこかけふのとまりなるらん

からくた物れなし題

こゆるきのなきさに風のふきしからくたものこさす浪もよせけり

こえふ

あとたえてゆくもかへるも年をへて人のこえふるあふさかのせき

上との濱

たほしまのなるとの浦のこきかたさうへとの濱もかくやあるらん

すゝむし

あすからは岸やくつれてうちにとすすむしら波のせゝにみえぬは

みやまきのはたをわけてもしら露はたかし〳〵のまつもみつらん
らに
人知らてたちきるやまのからにしきをくらの山のもみちなりけり
りうた
たもひきや萩の下葉のつゆはかりうたうまたきにうつろはんとは
だほみつ
あしわけの小舟にのりてさはりたほみつまにあひ見ぬ戀もする哉
十一にて梅花に雪のかゝれるを見て
にほひをそわくへかりける梅か枝に花まかはして降れるしらゆき
わかな
君かため若菜つみつゝ千代はへんめつらしけなく野邊はみるとも
又

よし野山ふもとの雪はきえにけりところもかたしきわかなつむなり
梅花
はるかすみたつかたをかの梅の花にほはさりせはたれか知らまし
こうはい
しろたへににほふもあかぬ梅の花くれなゐふかきいろさへそ見る
あるところにて雨のうちのこうはいをしみてふみ
つくり人々歌よむに
くれなゐの梅の花かさあめもよに今日ををしますはなをみたさし
たなし年はしめのこころのこうはいを殿上人こころ
のしうなとしてをしむ
梅のはなくれなゐふかき春の夜のいろをも香をもてらすつきかけ
春くら人こころにかれこれうこのうまはにて櫻をを

しむ

詞 さくらはなちらさてちよも見てしかなあかぬ心はさてもありやと

人のさうしの為に山里にさくらの花さけるに道ゆく人のいひいるゝ

あらしのみふく山里のさくらはないさしのさけきひとは見えしな

うめのみやにてさくらの花ををしむ

風にのみたほせつれともさくら花けふはこゝろとちりはてぬへし（めりイ）

ある女のもとにて櫻ををしむ

ひとゝせにひとゝせなから散らすともいつか櫻のはなにあくへき

又たなし

春風のふくたひことにさくらはなこゝろのとかに見るほとそなき

人々わかるゝところにて櫻花ちる

をしめともとまらぬ君をさくら花わかるゝみちの見えぬまてちれ

四月一日人のもとに郭公まつ

我にまつなきてきかせよほとゝきすまた世になれぬころの一こゑ

たなし

里よきてまつもなかなんほとゝきす身のうき事もかたらはまほし

八月十五夜くら人ところにてつきのこゝろをあはれかりてたちいてゝゆくにれいけいてんみさうしのこたち花すゝきを折りてたてしとみよりさしいてたり

しら露のたくよりまねく花すゝきむすはぬさきにまつそみたるゝ

返し

なへて人むすはぬまへのはなすゝき風にのみこそみたるへらなれ

またをとこ

さためなくまねくたもとにはなすゝき穂にいつる秋ははからるゝ哉

　　又をみなへし

わかやとに植ゑてたに見ん女郎花ひとはしたなるあきの野よりは

　　秋の野に出てあそふ

なへてさく花の中にもをみなへしたほかる野邊はすきうかりけり

　　さかのにせんさいほる

もゝしきにうつしうゝとも女郎花わかたつね來しこゝろわするな

　　たなし野にて人にいひかく

目につくはすくなかりけり女郎花あまたたほかるさか野なれとも

　　をみなへしの花もて來て人の植うるに

蟲の音のほかにもたえぬをみなへしいとゝ物思ふやとにうゑつる

　　ときとくかよふ人のもとに女郎花うゑて程へて

をみなへしうゑて後よりいかなれは露のこゝろもたきてなるらん

　　山里のをみなへし

あらしふくみやま里なるをみなへしうしろめたくて歸るけふかな

　　物いふ人にとこ人かよふときゝていきたるにをみな
　　へしを折りていたしたるに

をみなへしなへて草葉にたく露のあきはてかたに見ゆるころかな（こゝろかイ）

　　こせのせんさいほるとて

女郎花あまた見すてゝすきゆかはさか野のころとたもふへきかな

　　あそのゝより歸りたるにあるさうしのこたち物いひか
　　くるに

もゝしきにうつして植うる女郎花こゝろたこりのいかゝせさらん

　　萩の花人にやるとて

さをしかの音になきそむる秋萩を折りてそみゆるひとのこゝろは

あるひとのもとにゆきたるに萩を折りてさしいたし
たり

あき萩のいろつくまゝになく鹿のこゑをはよそのことゝきゝけり

人の家に萩うゑたる見て

妻こふるしかのなみたもかゝらしを今さへかゝる萩のうへのつゆ

人とものあそふ所に萩の花あり

秋きてもほとはへぬれとこのくれにおところくはかり風や（はイ）ふきぬる

六月十餘日秋のせちにいる

こよひよりをきの葉風のおとすゝし秋のさかひにいりやたつらん

七月七日

ひとゝせにこよひはかりそ天の川こひつゝわたるせに（をイ）すこしてよ

同し題を

天の川いまはみなせになりなゝん今日ひこほしのふなちこくへく

おなし秋風を

おほかたに吹く秋風もこゝろあらは物思ふやとのをきの葉はよけ

七月七日秋の夜の蟲といふこゝろを

なにことを草のまくらにおもふらんなくこゑたえぬ秋の夜のむし

七月山寺にまゐるついてに野邊の草むらの露を見る

秋の野をけさ來て見れはふちはかまわかぬきかけし露もはらはす

紅葉を遠く見やる宮の御屏風の繪に

あき霧はたちかくせともあしひきの山のにしきはたまにみかけり

おなし題

たつた山みねのもみちも見るへきにきりたちこむる秋のそらかな

なみちかき山の紅葉さかりなるところを人の馬にのりてゆく

あしひきの山のにしきをしむとて波さへけふはたゝぬなるへし

十二なりける年九月によめる

花すゝきまねくたもとはあまたあれと秋はとまらぬ物にさりける

むさしのかみひてしけかつるのかたのとうかいあせちとのにたてまつれりそのつかひにしろかねのかめのはこにくすりをさめてそれに

今年より君にちとせをゆつるをそとうかいたうにもとめいてたる

返し

ちとせふるつるのありけんかたにやはけふ萬代のかめをすません

たなしとのゝきたの方はくろめすみを船につみてすみうきよしある所に

をりはへて君かたきしにこく船はすみのえにこそほとはへにけれ

たやのしもつふさになりて下るにあにのあふみのかみうちいてはまにてよめる

もろともにうちいての濱にたつ波のかへらんほとを思ひこそやれ

返し

世の人のうちいてのはまといふことは涙のさきにたつ名なりけり

さてをはりより歸りてくら人ところにふしたる夜も

あつま路へゆくたひひとをわかれきて思ひこそやれ秋の夜のあめ

のあはれにてこれかれ秋の夜の雨といふ事をよむに

桔梗

しらつゆのたけける草葉に風すゝしあかつきちかうなりやしぬらん

くさのかう

しら露のいかにそむれは草のかうたくたひことにいろのますらん

ほそをさこ

春の田をうちかへしつゝほりたつるほそをさこみ（ともイ）さ思ひけるかな

たゝのこひ

新古 しもこほりこゝろもさけぬ冬の池に夜ふけてそなくをしの一こゑ

ある所のせんさいあはせに

しら雲のはるけきみねのひめ小松きみかちとせのかけことこそ見れ

志賀の山こえに紅葉のかけに鹿

うりふ山もみちの中になくしかのこゑはふかくもきこえけるかな

うちのあしろにて

もみち葉のなかるゝ河はぬはたまのよるそ網代のいろは見えける

秋来れはうつろふいろのこきからに萩のした葉を見るそつゆけき

秋の野はからくれなゐになりにけり鹿のふりてゝなきそめしより

なひくこもたのみけるかな花すゝき風にのみこそまかせたりけれ

さを（をイ）鹿の音になきそむるあき萩は折りてそみゆるひとのこゝろは

わかやとにうつしうゑつる女郎花あきの野かせはあたりしもせし

人のもとにをみなへし植ゑて

宇治のあしろにて

みなかみに紅葉ちるらしうち川のせゝさへふかくなりまさるなり

人のもとへやる

花すゝきかせにみたるゝゆふくれそあやしかりけりと思ひしらるゝ

いつとなく時雨のそらに秋くれはもの思ひそふることそたほかる

六月に萩の下葉を見て

さきたちて萩の下葉も（はイ）いろつきぬおくれてあきはいつくまてきぬ

朱雀院の御屛風にはらへする所に

おほぬさをはらへやることも此河のかみはしるらんふかきこゝろ（とイ）は

三宮にうちまきたてまつるとて

五月まつほとにさはみつまさりつゝ淀のまこもも生ひにけるかな

こかくれて五月まつまのほとゝきすしのひてなけと聲つきぬへし

わかあはせに

卯の花のかけにかくれて今日まてそやまほとゝきす聲も（はイ）をしまぬ（むイ）

いまよりは聲なをしみそほとゝきす五月まつまのほとそあるらし

ところにて

さくら花をしむにとしのおいぬれは恨みてすき（くすイ）しをりそおほかる

三院の宮のみやす所わかなをたまふに（てまつるにイ）小松あり

かたをかの野邊の小松を雪間よりとゝろことにそ今日はひきつる

又

かすみたつ野邊の若菜をけふ（もイ）よりそまつのたよりに千代はつむへき

同しとのゝきたの方たとゝに若菜まゐり給ふ

あさみとり野邊の松ひく子の日してつめる若菜はちよそはるへ（けイ）き

子日承香殿御方に

君ひかて子の日の野邊の老いぬるを何をまつとか世をはつくさん

人の子うみたる七夜に

かねてより千とせのかけそおもほゆるまた二葉なることし生の松

おなしこゝろを

雲居にもいまはまつらんあしへなる聲ふりたつるつるのひなとり

冬の夜のなかきをおくるほとにしもあかつきかたのつるのひと聲

ものへゆく人にこうちきぬはてやる

このたひはえたにぬれあへすからころもたつにとまらぬ涙ならぬに

年ことのはるのわかれをあはれとも人におくるゝひとそ知りける

物へゆく人にきぬとらすとて

わかれ路の草葉の露もはらへとてやかてかわかぬころもをそやる

おなしくはきぬに心もたくへてんなみたのとまるものならなくに

みちつゆははらふはかりのから衣かけてもうすきこゝろとな見そ

みそきつゝわかるゝかたの河波にたちかへりけんほとをこそ思へ

袖のうへにうへしら露そかゝりけるわかるゝ道のくさのゆかりに

わかれては思ひいてよと朝ほらけつゆけなからもぬるゝこゝろもそ

いかなれはつけても人のわかれけんふかきこゝろの遁れさりけり

そのこころにて人のわかれをしむ

よそにても君わすれめや百とせのおのかさまゝをしむわかれを

をしまねと我身のいけるほとは猶おもひもしらすなからふるかな

はらからの身のしつむよしよめりけるに

君をたにうかへてしかななみたかはしつむなかにも淵瀬ありやと

ふくにておやのむかへて歸るにいやうし川をわたる

さて

おとにきくふち井の河をたちかへりかなしき瀬をも渡りぬるかな

正月六日うくひすの初音をきゝてはらからに

うくひすの初音はかりそきこえ（ゆなィ）けるはるはいたらぬところ〳〵に

おほいその岸にきよする白波の（かィ）うらみてかへるほとはまさらし

わすれたる女の家にあまやとりしてゐたるを今はこ

こにかといひたり

ふるさとは雲居の外にとふかりをよそなる人はかへるとや見ん
うきこともまたしら雲の山のはにかゝるやつらきこゝろなるらん
みやま木のこりやしぬらんと思ふまにいとゝ思ひのもえまさる哉
君によりいくらはかりかたちぬらんつきぬは人のなみたなりけり
はかもなきあとゝ見なからうれしきはいくらはかりの涙いつらん
けふりとそうき世の事はなりぬへき空にわかるゝわか名とならは
神無月しくれにそひてもみち葉のふるにかひなきものにさりける
はる風になひくやなきの糸よわみこゝろほそくてたゆるきみかな
うきことを空に知りせはしらくものかひなき山にかゝらましやは
あきの野の草葉を見れはたとしなへてうき身のほとにたけるしら露
わすれかひよせもやすると住吉のきしうつなみをかそへつるかな
たもひやる夢路かはらぬものならはたほつかなしと君もまちみん

いひしらぬたもひそひつゝしのゝめにたのか衣そつゆけかりける
はらへしたる女を見て
みそきせしなこしのよより人知れす頼みわたるとひとはしらすや
をしのこゑたえすなきつる初霜にこゝろをさへもたかせつるかな
した紅葉ちりくるあきのかせことにしくれぬさきも袖そつゆけき
わすれかひひろふはかりに住吉のうらみてわたるほとはへにけり
はなさかりすきもこそすれ女郎花にほひてかせにまつなひかなん
ふくかせになひくものにが（かはイ）をみなへしつゆけき（の心もイ）衣たかせさる（らなイ）らん
きえぬへき露の我身もとこのはにかゝれはとまるほとそかなしき
わすられぬこゝろも君にとゝめてん今はかきりにたもひなるとも
けふりとも雲ともつひ（いまはイ）になりぬへしつれなき人はよそにこそみめ
たもふこといはてやみなは山城のとはにくるしき身とやなるらん

かくこそは逢見る事のかたからめおほつかなさはいかにせよとそ
からころもしほるはかりになりにけり涙もあめもふりてきゆれは
ひと知れすふりかくれともから衣なみたにのみそあらはれぬへき
すゑの山まつひとをのみたのみつゝ我をはなみにおもふなるへし
よにもにす物思ふからに苦しきはおのかこゝろのしわさなりけり
世のうさも人のつらさもしのふるに戀しさにこそおもひわひぬれ
いせの海のあまのぬれ衣きぬ人は我な(わかるイ)とおもへはのこらさりけり
わするやとしはしはかりもしのふるに心よわきはなみたなりけり
いとゝしく物思ふことのまさるかないつわか戀のやまんとすらん
戀わひて身のいたつらになりぬともわするな我によりてとならは
こゝろにも命かなはぬ世なりけりかくてもいける我身とおもへは
今朝こそは別れてきつれいつのまにおほつかなくは思ふなるらん

あひ見ぬにしぬへきものと知りぬれは心をさへそころしはてつる
あひみてもちゝにくたくるたましひのおほつかなさを思ひおこせよ
風ふけははこねの山のたまこすけなひきてわれにこゝろとゝめよ
おほ井河ゐせきのほかになるたきはおのか上こそかなしかりけれ
いひ知らぬ思ひのみこそまさりけれ行さきいかてましてまとはん
住吉のうらみつへくそおもほゆるしほのひるまもいまはなけれは
なみた川えもせきあへすなりけ(ぬイ)れは今はかきりとおもふなるへし
あめふれはつねよりまさる澤水ときゝしはきみかなみたなりけり
心をもかつはわりなしと思ふかないつのまにかはもえかへるらん
くもかくれすきゆく月の夜もすからおほろけにてはかへる比かな
なつころもうすきたもとにたち(おきイ)かへる涙はしはしとまらさりけり
こりすまに猶もかへるかたまほこの道ゆくすゑに見ゆるものかな

こゝろをそならはし物といふなれとかた時のまもえやはわするゝ

恨みてもかひなきものとしりぬれはいきてかひなき我身なりけり

すみよしの岸によすなるわすれ貝せめてこひしきけふそもとむる

なつころもいとゝ涙にそほちつゝたほしきこともいはて來にけり

戀と（しとはイ）いふことをもかへぬ比なれはいひしむかしはのとけかりけり

しらくものしらぬ山路にかくれなんかゝる浮世のところせき身に

我なからわりなきことは知られけり今宵はかりはのとけかれかし

音にのみきゝわたりつるところも川たもとにかゝるこゝろなりけり

いなりにまうでたるにたきのもとに女手あらふ

いなり山やました水をむすひあけて君さへかけにならへつるかな

返し

山川のなかるゝみつのはやけれはむすふはかりのかけもとゝめし

又かへし

あかすしてわかるゝ今日にむすふ手の雫ならねとにこらさりけり

かもにて人に

みつかきのよそに見るともゆふたすきかけても我を思ひわするな

ゆふつけの鳥につけても忘れしをかなしなを（けイ）やはきみはのこさぬ（ぬイ）

雲間よりはるかに見ゆるしらゆきの山路をいかてこえてきつらん

いまはとてわかるゝ袖のなみたこそ雲のたもとにたつるしらなみ

山たかみみねの白雲ふりはへてまつか（かへるイ）とこれもへはものうかりけり

きみこふと我そなかれていはるへきなみたの河にうきしつみつゝ

伊勢の海になこりをたかみわふる蜑も物思ふことはえしもまさらし

いかならんと思ふ心のうたかひにうらみてかつはゆゝしかりけり

むすめは京にておやは人の國にあるに

目に近くつらきにまとふたましひをいとゝはるかに頼めつるかな

朝ほらけかへるまもなく降る雪にみちのゆくへもまとひぬるかな

人のくになる女に

里とほみいかにせよとかかくのみはしはしも見ねは戀しかるらん

ゆくさきにおもひ知りなん秋霧のしはしも見ぬにまとふものとは

つねよりも物思ふことのまさるかなうへもいひけり秋のゆふくれ

よそにてもなひかさらめや人知れすこゝろをはるの風につくれは

わひはてぬ今はかきりの身なりけりいきて歸らんことそゆゝしき

うしとてもかつはきえなてふるほとに我身は雪にたとらさりけり

夜もすからたちかゝりつる草まくらなみたもかゝる旅もありけり

世のつねのおもひならすと我こひを君にはいかてことに知らせん

限なくたのむにのみやつれなきとほにいてゝのみかつはくるしき

おもひつゝつめる（へぬイ）月日のほとよりも恐ひかねつる我にやはあらぬ

風ふけは入江にさわくあしかものたのむかたなくなりもゆくかな

みなせ川なかれてとまる水くきの見えぬたえまはなみたなりけり

はつ雪にかくれて見えぬあとよりもおほつかなくて程もふるかな

きよみつのやまほとゝきすきゝつれはわか古里のこゑにかはらぬ

えそいはぬ我はあしへのたつなれや知る人なしにぬれてとしふる

あききりのはれぬ思ひにまとはれてかりの羽風におとろかすかな

いひそめぬほとはかりこそ池水のふかきこゝろもつゝみこめつれ

蟲の音のかすそまさらんおなしくは君かまかきのつゆにたにきけ

さゝかにのいかにせよとか我戀のたのもしけなきそらにしの（もイ）ふる

君こひてつゆのいのちのきえかへる程をたになとまたすなりぬる

すみよしの岸のしらなみ袖ひちていまはいふかひなくそなりぬる

いひはなつ君にしあへはたほ澤のいけるかひなき身をそうらむる
いひそめしいけの水くきたゆれともふかきこゝろは忘れさりけり
今そ知るなれてののちもからころも袖になみたのかゝりけりとは
きみ戀ふるゆめのたましひゆきかへり夢路をたにも我にをしへよ
ゆふつけの馬のひとこゑあけぬれはあかぬわかれに我そなきぬる
もしほやく蜑のたく火の下にのみもえつゝあらき我にやはあらぬ
身をうみにたなし涙はかゝらしをつきすたもとにたちにけるかな
なかたえてあまたの年になりぬれは今はかひなし身をそうらむる
こひしなはこよひもあすも知らぬ身をいけるほとたに心とゝめよ
新古 なみた川身もうくはかりなかるれときえぬは人のたもひなりけり
うたかひに猶もたのむか伊勢の海の蜑のたくなはくりかへしつゝ
ひたちなるいかこの崎のわすれ貝ひろふかひなきものにもある哉

あすかかは人たのめなる世なりけりわたりそめけん我そくやしき
たなしくは我身も露となりなゝんきえなはつらきことのはもみし
身のうきにたもひあかしの浦風にあまのなけきはいつかたゆへき
すみよしのこひわすれ草たねたえてなき世にあへる我そわひしき
まことひつゝ幾代へぬらんかほとりのみえし山路のなほもはるけき
いつか我なみたのたえ〔つきィ〕んからころも君かこゝろのつらきかきりは
わひぬれはあかつきかけてかへりたる鴫のはねかき我そかすかく
たもひつゝひとりぬる夜のからころも夢路にさへも露はたかしを
三輪山のしるしの杉もかれはてゝなき世にわれそきてたつねつる
なき人のゆきけんかたはたつぬともこのよの事はゆきてをしへん
伊勢の海のあまのつり船はる風になころをたかみいかにわふらん
かすみたつ三輪の山もとひと知れすはるのなけきを我につまする

雪ふれはまつそかなしきみわの山しるしの杉もみえしとたもへは
あさほらけたきゆく露はきえぬへしいつしかくれと頼みけるかな
君こふるなみたにぬるゝからころもかへる程なくよるそわひ（かなイ）しき
ひさしくこすとてふすへて出てぬ人に
こむらさき君かむすひしもとゆひの塵うちはらふほとまてや来ぬ
きみこすはわれもかへらし神無月しくれにさへやぬれてかへらん
かりそめのこゝろくらへにあふことの命も知らぬ身とは知らすや
又人に
つらさのみまさりゆくかな思ひやる夢のたましひいかにつくらん
くさわかみ植ゑてわかれし女郎花わかみぬほとにかれにけるかな
きみたにも我たにあさくなりはてはたれもはぬ山にいりぬはかりそ
ひとりねのわひしき旅のくさまくらくさのゆかりにとふ人もなし

君こふとたもふこゝろのたよりにも今はたろかになりぬへきかな
ゆめにてもあふと見えなんこひわたるなみたの川は淵瀬ありやと
新古 しらたまか露かととはん人もかなものたにもふ袖をさしてこたへん
わすれたる人にいひやる
網代ゆくうちのかは波なかれてもひをのかはねを見せんとそ思ふ
返し
世にしへはくらけのほねは見もしてん網代のひをはう（よイ）る方もな（あらイ）し
かすみたつ野邊ふく風もさむからて我身のよにそはるはたちぬる
春くれてなくうくひすのひと聲を木かくれてこそきかまほしけれ
ちるほとは雪と見ゆれと梅のはなかせににほひてきえぬはかりそ
かたらふ人のとの居物かりたるうらのいたくあれたりけれは

こしをへてなれるなりとはから衣うらみてかへすあはれなりけり

いく野といふところより人をかへして

別にしほとにきえにしたましひのしはしいくのの野邊にやとれる

仲文集

けさうし侍りける女のしにけれはいとかなしくて女のはらからのもとにいひやる

なかれてとたのめしことは行末のなみたの上をいふにそありける

たひ道ゆく人みのゝ國ときのこほりといふ所にやとりて

むすひたきし人やとくらん下紐のときのこほりにたひねしぬれは

忍ひてかよふ人のもとにたほかたのまらうとにていひきたるに雪のいたくふりけれはしのひていひはへる

春かけてしのふるなかもあるものをいかなるまよりゆきかよふらん

女のもとにこむとての夜はこて後の夜きたるにふす
へてあはねは

ことわりやこよひのつみのそこにはやいれよふしなむさり所なし

中将殿せんさいつくろはせ給ふにこゝろなき人のな
てしこをすきてすてたるを

すきものを花のあたりによせさらは此ところなつもねたえましや(せましやィ)は

大風のまたのひ家のほかよりもうたてこほれたれは
ちかき所の程なるさきの中将きんたふの君に

わか宿は野分のほかもとなりよりあれまさりたるこゝちこそすれ

御返し

隣よりあれまされりこいふなるはいかなるかせに身をは吹くらん

花の枝にふみのあるを見て

春のことふこゝろつかひをたつぬれは花のたよりにこてふなりけり

承香殿にさふらひける人をかたらひけるかみそか
人をもたりてまかりたりしかはまことひかくしてける
にくつのありけるを見てまへのやりみつに生ひたり
けるねせりをとりて

さは水につみあらはるゝ忍ひねをかくせりけるはうきこころかな

みたけさうしすとて石山にこもりたる女はう(くらィ)人まゐ(う)
り(てィ)あひてとはす侍りけれは

いつくへも身をしかへ(わけィ)ねは雲かゝる山ふしみてそ(もィ)さはれさりける(りィ)

返し

鳥の音もきこえぬやまにいかてかは雲路をわけてひとのかよはん

ある女りんしのまつりに車にのりなからきてたゝい

りにいりけれはこいへにてえかくれあへすゆふ日の
さしていとあらはなれは
思ひきやかけてもかくはゆふたすきけふの日影にまはゆからんと
返し
ゆふたすき神にかけてもちかひてん夕日にあてゝみてはあらしと
ふるきめのくれこひたるに
新古 花さかぬくち木のそまのそま人のいかなるくれにおもひいつらん
かくはかりくるにくるしきたく縄をたゝにくたしてやまんとやする
うりけるなへをこよなくいひおとしけれはうる人
地（ちうィ）こくのかなへにもこそにえたまへ多くのせんなおとし給ひそ
返し
かふよりもうるこそ罪はおもけなれうへこそかまの底にありけれ

法師（とねりィ）のそのにをとこありとて法師（とねりィ）のうれへ申さむと
いふときゝて
いにしへはとねりのねやの物かたりかたりあやまつ人そあるらし
きの國のこほりともをよめるいとなかなくさ
ありた　あま　ひたか　むろ
いとなかきよはなくさますあまりありたえすひたかん室にすまはや
雪ふりたるつとめて院の御かゆのおろしたまはせて
歌よめとおほせられしかは
しら雪のふれるあしたのしらかゆはいとよく似たる物にさりける
おなし人もとすけすはうにくたれるみちにえとまり
といふ所にて（よりィ）いひやる（おこせたるィ）　仲文
えとまりに我きたりとは知らねはや今まてきみか見にこさるらん（おひてこさらんィ）

もとすけ

返し

かきりなきよは（わィ）こをこのむ君なれはかへりはみ（しィ）よにきたるなるらん

たなしなる文堀川の中宮うせ給ひて中宮の内侍のす

けせしなとあまになりたるもとに　仲文

かま（すィ）へつゝさてもありつる世をそむくうしろてとも思ひやらるゝ

返し　ないし

そむきぬるうしろてよりも極楽にむかはんきみかかほをこそ思へ

又返し

あかほとけ顔くらへせよこくらくのたもてたとしを我のみそせん

正月七日左（さい）衛（相のィ）門内侍に

老らくも子の日の松にひかれてや今日よりわかきなをはつむらん

たなし人のゆきのかみになる人のむすめけさうしけ

る人に

とけかたき下ひもしてもこゝろみよ思ふこゝろのゆきのしまゝて

もとのめをやむことなきものには思ひなからまたし

る人たほかりけるにもとをははしのまにて物かたり

なんとしてこゝに居たまへれ今まゐらんさていにけ

れはまことゝてむしろのかきりにゐあかしてあかつ

きに歸りきたるにいたのうへにさ（つゆィ）へはかりたかれて

ひえにけりとうらみけれは

ことわりやしたはさこそはひえつらめ君にしくへき思ひなけれは

物へいきけるに女にいま秋はかならすまかりのほり

なんすといへりけれは女

またすともあきとさらめや初かりの雲居になかむ聲をし（こィ）そたもふ（へィ）

ごう三條院にてあはたの大將中春花雪のことしこい
ふ題をよませたまひけるに
ふりまかふ花か雪かとたどるまにわか世のいたくふけにけるかな（もゆくイ）
三條殿にて公信（任イ）宰相の八月はかりに月のあかき夜せ
んさいの花見たまふに
つねよりもこよひの月はさやかなれ秋のゆふへもたどるはかりに
くにもちかしき◯使にありきける時にされたるとこ
ろのわかき人々こゝろしけれはそれうけさせ給へとい
ひいれたりけれはさうしの爲に女のかたありけるを
やりてこれたまへといひいたしたりけれはくにもち
源うみかこともときゝて
たらちめのむかしの親のかほ見れはうみのこともそ思ひやらるゝ

女返し國茂かちゝはうまのかみにてなんありける
たらちめの昔の親はさもあらはあれさてやはうまのかみのこはよき
むこのこともみつたえてきたりけるもののゝくともは
ことふにかゝみのとまりてありけるやるとて
影たえておほつかなさのますかゝみ見すは我身のうさも知られし
返し　　ともみつ
君とわかかたみに見んとますかゝみそこにとまれる影さへやうき
國茂かめに物いひけるにことをいたしたりけるにひ
きてかへるとて
かたらへとかひなかりけりむつことのしらへて歸るねにし違へは
おなし人ふくなるほとにむこのくら人に
きたりとはきくらんものを藤ころもかけてあはれといふ人のなき

返し

いまはとてかへしゝよりもふち衣きたり、ときくはいとゝかなしき

あなわひし人目のせきをこえわけて道をわするゝときのまそなき

返し

こゝろにもあらすうかりし夢路にはわすれぬ物そわひしかりける

又をとこ

程もなくあけてわかれしあかつきにいとゝ露こそたきうかりしか

春宮のくら人ところにて月まつ比

ありあけの月のひかりをまつほとに我世のいたくふけにけるかな

をとこのうらむれは又

つらきをし人の恨むるものならはせきには我そたゝむとはまし

うらむれとかひなきものと思ふるに又わすれかたゝなけきつるかな

返し

思ふといふなにはたえせぬ物なれは恨むることはたれとならす

本院の侍従の君國茂かあふきをとりてこへと返さて

またのあしたに

君にてもたれもひくたらぬ心にはあふきといふなたゝしこそたもふ

返し　　をとこ

あらかへと人にいへとやいふなとや思ひかへせとかひなきものを

をとこれとせさりけれは左京

ともかくもいふ言の葉の見えぬかないつらは露のかゝりところは

かへし

あたならぬこゝろにかゝる露なれはいはてそ思ふたきてこしより

院の大將このゝさふらひにくりやかねなはたゝくを
みてれなし人
くりやよりまた宵なれはねぬなはのわれらかゝひな叩くなりけり
返し　　　　　　　　　　　侍從の君
手もたゆく叩くくひなものこらねは猶ねぬなはのくりやくるしや
みるのいさなかきにつけて　　をんな
かつきけん蜑にもさはむ伊勢の海のちひろの底のまことゝそ思ふ
雖入勅集不見家集歌
拾　かはやなきいさは絲にあるものをいつれかあけのころもなるらん
拾　かをさして馬こいふ人ありけれはかもをもをしこたもふなりけり（ィなるへし）

忠見集

春
御屛風に春吉野山にかすみたてり河に船あり
かすみたつよし野の山をこえ來れはふもさは春のこまりなりけり
春日野やく
新古　やかすこも草はもえなん春日野をたゝはるの日にまかせたらなん
いそのかみに山田うつ人あり
拾　春くれはまつそうちみるいそのかみめつらしけなき山田なれさも
あすか河人わたる
あすか河ふちせかはらぬいまさらにむかしかたりのなそ流れぬる

井手に山吹あり

咲かてやむとしはなけれとこの春は井手の山ふきさかりなりけり

ふしみあれたる家を人わたる

としふれはふしみの里もあれにけりむかしの人はすまぬなるへし

夏よとのわたりに船あり郭公なく

拾 いつかたになきてゆくらんほとゝきす淀のわたりのまた夜深きに

おなし所にこもかる

拾 しけることまこもの生ふるよとのには露のやとりを人そかりける

もる山松おほかり

たかためにたみの年へてもる山に世をへてまつの生ひそはるらん

難波にあしおほかり船こく

なにはかたゆきかふ船のつなてなはくることそみえぬ芦のまをなみ

しら山に雪あり

拾 としふれはこしのしら山おいにけりおほくの冬のゆきつもりつゝ

みくまのに船よせてはまゆふとる人あり

みくま野の浦のはまゆふわれ船のなかにいくらをつみてかへらん

なからのはし

人知れすわたしそめけむ橋なれやおもひなからにたえにけるかな

みをつくし

吹風にまかすることもみをつくしまつと知ら（りイ）てやさして來つらむ

秋すまの浦に關あり

新古 あき風のせきふきこゆるたひことに聲うちそふるすまのうらなみ

たかさこにたひひとゆくしかたてり

たかさこの鹿なくあきのあらしにはかのこまたらに浪そたちける

さほ山に紅葉あり霧たてり

さほ山のもみちのにしきいくらこももえてや空にきり（しらてきりたつ空そはかなき イ）のたつらん

こゆるきのいそにあまあさりす

こゆるきのあまはあさりにやつれつゝいかなる時かなまめかるらん

冬むさし野にたひ人あり

ゆきくらす旅のやこりもむさし野の草むすふ夜はむつましきかな

あさかのぬま

月やさるあさかのぬまの水きよみよるもたまものなひくをそ見る

うきしま

たきつ波よせはよせなんうき島にこしふるまつをこゝなから見ん

たなし御屛風に正月子日わかなつむ

わかなこてたほくの年を我つまはきみそ子の日のまつにしるへき

二月はつうまにいなりまうて

たはふれのみゝしあらねはいなりやまいのる日よりそさかはゆきける

かみのさくみつの社にいのりすこ今日よりきみかさかえゆくへき

三月さくらの木のもこにてかのゆみ（ちイ）いる

こゝろにもいるひの弓はみやまなる（やまならぬイ）花のあたりにたこそこたふる

四月にいけのへんのふちをもてあそふ

いけちかくうつりにけりな藤の花こゝのそこのこいかてをしまん

五月郭公なく山に女くるまゆく

深山いてゝ都へならはほこゝきす（よイ）たひなきそへてここつてにせよ

六月河のほこりにかくらす

みなつきのなこしはらふるかみのこゝみつのこゝろはなきやしぬらん

みなかみの心なかれてゆくみつにいこゝなこしのかくらたもしろ

　　七月七日かはあん

波のたつ水のあやをもけふはなほたなはたにこそもたもほゆるかな

　　八月あふさかにこまひく

さやかにも見えすそありける逢坂のこまより見ゆるもちつきの影

　　九月九日菊にわたかつけたる

よろつ世も人のわかゆる菊のうへにまゆをひろけて露をまつかな（をゆかゆる菊そおくつゆのイ）（らくるときはきにけりイ）

　　十月たほゐ河のゐせきに紅葉なかれたり

いろ〳〵の木の葉なかるゝ大井河しもはかつらのもみちこや見ん

　　十一月りんしのまつり見る車あり

ひねもすにみれこもあかすゆふかけて賀茂の社にたひやつかまし

　　十二月なやらふ雪ふる

年こゝにやらふなはしてありつるをこゝしそつひに雪きえぬへき

　　ある所の屏風に正月せちする所あり

はるかすみたつこいふ日をむかへつゝ年のあるしこ我やなりなむ

　　二月子の日女いてたりれいけさうするをこゝきあひてせうそこす

子の日こもちきらて君か野邊くれは松にかゝりてよをやつくさん

　　三月つくるをしむこころ

人の身にきつゝはこまる春ゆゑにをしむこゝろのまこひぬるかな

　　四月家のかみまつる

年こゝにまつらむかすはきねそ見んいたゝくかみのしらくる近に（けゆく近イ）

　　五月五日さうふよもき家にふきたり

よはにのみなくほとゝきすたほつかな菖蒲みるへきけさはいつちそ（ふイ）

　　七月七日たなはたまつりしたる所あり

ひこ星かかけをまつよりたほつかなほのかにてらす月のいるかた

みまほしこれもひとこまにひきむかへ君かくるにそあふ坂のせき

九月九日

花の香をけさはいかにそ君かためまゆひろけたる菊のうへのつゆ

十月うちのあしろに女くるまもみち見る

そこふかき下葉のうらのすますして網代によれるひをのみやへん

十一月山つら（さとイ）なる女の家にかりするをとこきても
のいひたる

ゆふくれになれはきこゆる鈴蟲はたもへはかりのたよりなりけり

十二月佛名する所

罪とかは目にし見えねはふる雪のきえんあしたをみるはかりなり

ふる雪はこよひふかけにみゆれとも罪もともにはつもらさりけり

天暦十年三月二十九日れいけい殿の女御の歌合によ
めるかすみ

あらたまの春をも知らてふるさとはたつたの山のかすみをそ見る

風

かせさむみこほれる谷のしたみつ（みつしもそイ）は春くることをとくとまつらん（しイ）

雨

春雨はふりそめしかとうつたへにやまをみとりになさんとや見し

うくひす

わかやとのこすゑをたかみ朝ほらけなくうくひすの聲はるかなり

梅

香をとめてひとも見に來ぬ梅の花まちくらしつゝひとりをるかな

やなき

あをやきの糸はなひき（みたれイ）てよる（はイ）こゝに露のたまぬくをこやなるらん

さくら

をしむへき庭のさくらはさかりにてこゝろそ花にまつうつりける（ぬイ）

山吹

やまふきの花なき宿にすまはこそふりはへこほくいてつこ思はめ

ふち

たそくさく藤のはなゆゑいつしかこわれさへ松にかゝりぬるかな

わかな

ふりはへて君かためにこ春の野につめるかたみのわか菜なりけり

あはぬ戀

かきりなき戀をのみして世の中にあはぬなけき（ためしイ）をわれやのこさん

拾

あひてのこひ

夢のこゝなこかよるしも君を見んくるゝまつまもさためなき世に

右方のれうに霞

あさみこり春はきぬこやみよし野の山のかすみのいろに見ゆらん

風

やま河のなかれまさるははる風のたにのこほりをふきやこくらん

雨

はるさめそ山のみこりはそめてけるいさ今よりはぬれころもみん

うめ

わか宿にうめのにほひのみちぬれは折りてつめるこ人やたもはん

鶯

うくひすの初音ほのかにたほつかな春來にけりこたもほゆるかな

櫻

わか宿のものこもいはしさくら花をりてくらふるひこもあらなん

柳

あをやきの糸よりそむるほこもなくこくくるものは月日なりけり

藤

わかやこの松にひさしきふちの花むらさき野にはさきやしぬらん

山吹

やまふきの花のみきはににほへはやさはにかはつの聲きこゆらん

若菜

春來れはわか菜つむ野それもほゆるかたみにもらぬ（たイ）人し（のイ）なけれは

あはぬ戀

くれことにたなし道にもまよふかな身の内にのみこひの（はイ）もえつゝ

あひての戀

わかれてはくるゝもまたす戀しなは君やほこなきものをたもはん

こき〳〵のさうの歌梅のつくりはなを

うめの花はるまちわひてさきにけり今はにほひのそはるはかりそ

ねのひ

子の日する野邊のこ（にイ）松のなかりせは千代のためしに何をひかまし

松はたゝちこせこそつめひく人はいく世のねのひかそへわたらん

ゆきかへるほこさへこほき子の日かなちよの松ひくかめのをの山

ひこもこにちよを（ちとせはみイ）こめてん松なれはあまり多くもひきてけるかな

ひきかふる（てくイ）子の日の松のちこせをはまちみん君そひさしかるへき

ひく人にちよを（とせイ）わくこもかめ山にのこるよはひのたもほゆるかな

若菜

新古

若菜生（つむイ）ふる世にはからきもなかりけりまつにしるへき君に任せて

春をあさみかたみのそこにみたねとも君かためにとつめる若菜そ

かすか野（はるのイ）の草はみとりになりにけり若菜つまんとたれかしめけん

櫻ちりてなきをりに折りたるを人のもたれは

この折れる櫻のちらてのこれるはあらき風にもあてすやありけん

御前のさくらよませたまふしに

あさことにはきけん庭をさくら花けふよりのちやちりなから見ん

さくら折りてたこせたる人に

もろともにわれし折らねは櫻花たかさもえたにしらすそありける（おもひやりてやはるをくらさんイ）

きなからそ見るへかりけるさくら花折るまに多くちりにけるかな

いくそたひ春のさくらにこりぬらんしはしの色にたのめられつゝ

さくら見に有明のつきにいてたれはわれよりさきに露そたきける

やなき

わか宿のやなきのいろの春くれはみとりのいとこなりにけるかな

ちるはなをぬきもとめなんはるくれはいとよりかくる青柳のえた

山吹

井手にのみありときゝつる（こえしイ）山吹のこゝのへちかくさきにけるかな

我をたもふひとそあるらしふるさとに井手の山吹をりなからみん

やまふきを折るとはなしにゆふくれの蛙なくまてたてるかすみか

春のわかれををしむ

春ゆかは花とともにやしたひなんたくれはなにの身にかなるへき

はかなくも花のちり〳〵（とイ）まとふかなゆくへも知らぬ春にたくれて

たほそらをやまひ（ちをイ）さたのむ春くれはたひゆく雲をかすみと思はん

鶯

うくひすのなく聲（音をイ）きけは深山いてゝ我よりさきにはるはきにけり
花なれはえたに木傳ふうくひすのはるのすゑまてなくをきくかな
うくひすの聲をしるへにゆきくらし知らぬ山路にやこりをやせん
　六月うくひすなくを
めにみねこ聲にきこゆるうくひすのなくなるなへこ思ひけるかな
　わかれ
別路をいつかたへこも知らぬ身はゆくひこをこそこふへかりけれ
ぬさよりも我やゆかましみちのくの忍ふはかりのかたみはかり（おくイ）に
こほけれはたもひやる（はすイ）こも忘れなんかたみをすけて送るまされり
拾　露にたにあてしこたもひし君しもそしくれ降るころ旅にゆきける
　ものにいく人にぬさやるこて
ぬさよりもなく〳〵われやたくはまし涙をうくるたらひありやこ

ゆくみち（うみちこイ）を恨みてのみはやり（わひイ）はてしかへるの山のまつをたのみて
　せさいにほたるのこふを
新古　いつちこか夜はほたるのわたるらんゆくへ（かたイ）もしらぬ草のまくらに
　きくの宴せらるゝまたのひ
拾　ふく風にちるものならはきくのはな雲居なりこもけさ（いろイ）はみてまし
　はりまの國なるゆめさき河をわたるこて
わかれてもぬるこはなしに我みつるゆめさき河をたれにかたらん
　人に菊たてまつるこて
あまたあらはそふへきものを神無月のこれる菊のかきりなりけり
　すはまに菊植ゑてつるたてる
ちこせふるしものつるをはたきなから菊の花こそひさしかりけれ
菊のはなうつらぬえたのましれるは今（にイ）日よりのちに霜はたかなん

またやあるととふ人あれや菊のはなかきりなしともをしまるゝ哉

　はつ雪を見て

はつ雪にけさはたきてもたもふ哉さてもありつる我身ふりぬと

　戀

誰ならんはかなゝからそ頼まるゝかくてもつひにやましと思へは

はかもなくうきて見ゆれとしら雲の山にもかゝるものと知らすや

水くきもゆきかへりこすなりぬるを何になかるゝなみたなるらん

つてにてもとふへき物をはかなくもたよりなき身と思ひけるかな

いつくにか尋ねもあはん身をわけて君かゆるさぬこゝろつかひに

ひとをまつ心はいけのそこなれやいひそむるよりこひのつもれは

ほのかなる聲はかりにてきり〳〵すねなくに秋の夜をあかしける

よそにのみきゝてわたらぬあふさかの關の清水になかれぬるかな

ある人のたもふとはいひなからあはぬに

そこにして深しといふはたのまれす淺くてかけのたえせすもかな

　たほやけよりろくたまはるへきかたそけれは

やそうちのいたゝく山の雲なれはひさしけれともまつはたのもし

　ゐなかへなるいへのやけたるをみにまかりて

わか宿はけふりとなりて雲居なるいつくをさしてゆかむとすらん

　六月つこもりの日人に

うつせみはさもこそなかめ君ならてくるゝ夏をはたれかつけまし

　返し　　　　　　　よみ人たほえ侍らす

からころも（せみのこゑイ）くるゝ夏そとたもへとも秋もたつやとなとかきさらん

　うちのたほせことにてちゝたゝみねか歌たてまつれ

とめしあるにかきあつめてたてまつる

新古
言の葉のなかをなく／＼もとむれはむかしのあとにあひみつる哉

はしめてめしあけられけるに

君か代にさかゆくへしと思ひせはとはましものをたゝみねのみち

人の國にゆく人にきぬたくるとて

たひ人のつゆはらふへきからころもまたきも袖のぬれにけるかな

おくれしといはぬ涙もたむけにはとゝめかねつる物にそありける

ひたふれとらせんとすれとうらなんなきといふ人に

住よしのきしともいはしれきつなみ猶うちかけようらはなくとも

ものかつけて後になまみるをみなへしにかけてたま

へるに

みるめかるあまにたれと女郎花けふはわかくそかつきおとれる

屏風の繪にかすみたてる山よりたきたつ岸のほとり

に藤の花さけり

手もかけて［ふれイ］こゝにはをしむ藤の花そこにうつれはなみそをりける

やなきさくらならへるところ

あをやきの糸をそよれるさくら花ほころひはてゝちらん日のため

きりたちてみちかくせるところ

いろ／＼の紅葉のにしき霧たちてのこれるはてをいつくとか見ん

やま里にすむ女しかの聲をきく

つまこふる鹿なくときになりにけり我ひとりねをたれにきかせん

おきないねはこひつます

拾
秋ことにかりくるいねはつみつれと老にける身そおきところなき

むかしかたらひし人のとしころありてつのくにたま

さかといふところにありけるをきゝつけてまかりあ

ひて夕くれにすゝむしのなきけれはよめる

たまさかにけふあひみれと鈴蟲はむかしなからのこゑそきこゆる

みまさかの國にてかつまたのゆを

この山や（のイ）みちのかきりと思へともかつまたのみゆとほきなりけり

はりまのこふにやとりたるに郭公のなけは

誰をかはこふわたりなるほとゝきす草のまくらにたひ〳〵そなく

たなしくになるふなさか山といふ所にて

かせたはぬふなさか山はとし月もたなしとこころそとまりなりける

ある人のもとにをとこにかへれるに

なり〳〵てもとにたちぬる人をこそ色このみとはいふへかりけれ

つのかみのふるうたことひたるにやる

なにはつのあたなのことは住よしにとしふる松そ知らはしらなん

たちによひて物いふついてに

拾 難波かたしけりあへるは君か代にあしかること（わさイ）をせねはなりけり

つくしへ下るみちにあきのくにのあしのやまをあめ

ふる日こゆとて

ひとたひもまたこぬ道にまとはぬはあめの下こそしるへなりけれ

ぬのひきのたき

雲（峯イ）のうへにさらすもの（たえイ）ゝみたなひくはしろくたちくる布引のたき

女のもとにゆきて物いふにあめのいみしうふれはい

とくらうてそらもみえぬによなかはかりにとをひき

たてゝいりぬれは

音にきくなるとのもとにかつきする蜑よわひしきめをみするかな

京のたよりなかりけれは津の國にすまんとて行くみ

ちにしりたる人あひてなにしにかくはゆくそことひ
けれは

拾 みやこにはありわひぬれは津の國のすみよしときく里へこそゆけ

かれより京へいひおこす

津のくにのわかたのみとし住吉もたよりなみこそまなくたちけれ

いよにいきたるによしあるうかれめのいひたる

音にきゝめにはまたみす播磨なるひゝきのなたときくはまことか

返し

年ふれはくちこそまされ橋はしらむかしなからの名たにかはらて

津の國に年ころ身をしつめてこもり居たるをそのさ
きの御かときこしめしてめしあけさせたまひてけり
よさりくら人ところに侍りてまかてにけるあしたに

ありとしのあそむしておほせ給ひける

見しかともなにとも知らす難波かた波のよるにてかへりにしかは

御返しまゐらす

住吉のまつとほのかにきゝしかはみちこししほ(なみィ)やよるかへりけん

前たいの御時凡河内のみつねか候けんれいにてみつ
しところに候へとおほせことありしを其後せしのお
そかりけれはそうせよとおほしくて藏人のもとにや
る

さくら花たかきこすゑのなひかすは歸りやしなん折りわひぬとて

御返し

折わひてかへらんものかきしかけの山のさくらはくもゐなりとも

さてせしたまはりてみつしところにさふらひてまゐ

らす

年をへてひろきのなたにしつむ船浪のよするをまつにそありける

朱雀院のわか宮より藤の花たまはせたるに

いかてかはちらさゝるへきふちのはな風によりてそ浪もたつらめ

しけみつの中將のこの居こころに菊をうゑたきてさきうつろふまてまゐりたまはねはたてまつる

菊ならぬはなにありせはちりなまし植ゑて霜にはたかせたりとも

宮つかへする女をさそふとて

月かけにみちのあひたはあかくとも今夜はともにいてんとそ思ふ

きぬふたむらたまふとたほせことたまはせけれは

きのふまてうらみし風はたほそらのむら（うきイ）雲はらふつかひなりけり

かくたほやけにつかうまつりてもと住し所へ通ひて

いにしへのにしきはものかもろしきをきつゝかよふこともふ心は

繪（のえイ）にすみよしのかたをかけるを

すみよしの松もた（はイ）いぬとたもふらんかけにも浪のそひ（よりイ）て見ゆれは

山より瀧たちたるところ

みなそこのわくはかりにやくゝるらんよる人もなき瀧のしらいと

殿上人々をんなくら人とものまつはらにいてゝねのひしけるひ

みな人（やイ）の子の日する野をこゝのへにかすみへたつとよそに見る哉

あるみやす所の御かたにつかうまつりける人につけてうへのきぬのうらなとや侍りけんたまはりけれは

よめる

波たかくよるへくもあらぬ船なれや浦にもつけてたきなからみん
　たなしみやすこころまかて給へりけるにしはしこま
　りたりける人もまかてにけれはやりける
すもりこもいてにけるかこ見るこきはかひなき身さへうらやまれぬる
　うちにさふらふほこに家のやけにけるをのちにいき
　て見てくら人のもこにやりける
すみかなみ霜にわひたる蟲のこゑなきてきくこききみにつけなん
　またいつにかありけむ
神無月いかてかはふる世のなかにたつるなみたそしくれなりける
　かるかやを
しら露のかゝるかやかてきえさらは草葉そたまのくしけならまし
　又いひにやる
よそにしてわふるなみたを我ならぬ人はしくれこよそにみるらん
　こしかへてのころうらみたる人に
いつかたに立よれこてかはるかすみ思はすにのみそらにみゆらん

中務集

子日

野邊にいてゝけふひきつれは時わかぬ松のすゑにも春は來にけり

いへの花見るこころ

野山にも見るへきものをわかやこの花をなかめて日をはくらしつ

藤の花見る春をしむ所

ふちのはなさくを見すてゝゆく春はうしろめたくや思はさるらん

山里にほとゝきすきく

山さとにまれらなりけるほとゝきすまたこもなかぬ聲をきくかな

たのなかにかりしたる所

袖ひちて植ゑし春よりまもる田をたれかは知らてかりにきつらん

なか月の九日菊にたもてのこひたる人あり

たいにける身をはしるしもしら菊の花のなたてになりにけるかな

賀せさせ給ふ御屏風　わかな

若菜つむ野をしめたかむきみかため千とせの春はわれそつむへき

つるのあそふところ

きみてへはいのちをゆつるあしたつの雲の中をやたもひやるらん

はまつらまつたほうたてり

うらちかく波たつまつは色かへて世にすみの江のたふるなりけり

はまに貝ひろふ

いさりするあまものとかに波たてゝけふはかひある心ちこそすれ

三條の大まうちきみの賀中納言のつかうまつる屏風

の繪にはなみてかへるところ

詞

あかてけふ（のみイ）かへるこたもへと山さくら（さくら花イ）をるへき春そつきせさりける

いけにのそきたるまつに藤かゝれり

君たもふあたしこゝろもなきものを池のふちなみまつこえにけり

たちはなにほとゝきすなく

いろかへぬ花たちはなにほとゝきす千代をかたらふ聲そきこゆる

野にかりしたり

女郎花かりのたよりときゝしまにあまたのあきは野邊に來にけり

やり水のつらに菊さけりをとこふみかく

なかれつゝかけも見るへくみきはなる菊にこひしき人はならなん

むらかみのせんたいの御時御屏風　ねの日のやく所

春はかく野をのみやくとたもふまになへて草木のいかてもゆらん

花をしむにかへる雁なく

こゝまらぬ花ををしむにいこゝしくかへる雁さへなきわたるかな

岸に藤かゝれり

かはきしに生ひたる松に藤なみのかゝれこゝしのつきぬなりけり

五月五日爲中家に女こもいそくいこくりさうふふけり

あやめくさ手ひきの糸の手にかけてなかき日くらし人そこひしき

田まもる家にしゝのはむをも知らてねたり

まもりくる山田のいねにまこふ夜はゆめこそ鹿の音をはきゝける

むらかみの先帝の御時の屏風くに〳〵の所々のなを
かゝせたまひてよしのゝ山を

よし野やま雪にはあこもたえにしをかすみそ春のしるへなりける

あすかゝは

新古 さためなき名にはたてれこ飛鳥川早くわたりし瀬にこそありけれ

いそのかみ

いそのかみ古きわたりを來てみれはむかしかさしゝ花さきにけり

ふしみ

うめの花ちりかふそらはくれにけりふしみの里にやこやからまし

もる山

ひこめのみもる山になくよふこ鳥しのひにたれをなく音なるらん

すま

もしほやく煙になるゝすまのあまは秋たつ霧もわかすやあるらん

さほ山

はつかりの夜ふかゝりつる聲によりけささほ山のたもひやらるゝ

しかすかのわたり

新勅 ゆけはありゆかねは苦ししかすかのわたりにきてそ思ひわつらふ（たゆたイ）

うきしま

たのまれぬこゝろからにやうき島のたちよる波のとまらさるらん

なこそのせき

みちのくのなこその關に來にけれときく／＼猶もこえぬへきかな

また御屏風

人しれすをきのしたなるさを鹿もほにいつるゝ秋やねにはたつらん

とこなつ

うちはへて見る常夏のあかぬかな日ことにまさるいろのみゆれは

十二月つこもりに

ほとちかくきぬなるものをいかなれは春にもあはて年のゆくらん

村上の先帝御時のしきの御屏風の歌 ゐなか家にを

とこまらうと居たり

梅か香をとめて來つれはめつらしきうくひすならぬ聲もきくかな

きしのこゑ

はるかすみ朝たつ野邊とたつとりもしのはぬ音にや人はしるらん

ちかき山のまへ

わかやとの春の山邊のつまなれはほかのはなともたもほえぬかな

四月みあれ

神をたにいのりをきけはうちつれてたちかへりなんかもの川なみ

五月五日

しるきかもにほはなるかなあやめ草けふこそ玉にぬく日なりけれ

したくゝる水に秋こそかよふらしむすふいつみの手さへすゝしき

秋のあかつき花見る所

ありあけのひかりにまさる女郎花なかき世に見んつゆにたきつゝ

野の紅葉みる

けふをらぬ人もさそはぬもみち葉によのまふきくる山たろしの風

冬こもりしたる家

こほりぬる池のみきははみつとりの羽風になみもさはらさりけり

雪のふるに物へゆく人

雪ふかくゆくあつまちはとほけれとみちにて春にあひぬへきかな

すさく院のわか宮の御もきの御屛風の歌

小松はら野邊にいてねともなはぬ春のかすみもたちましりけり

うめの花見る所

梅の花折るたもとをも見つるかな香をたつねてもとはんとそ思ふ

やなきあり

くりかへりはるは來ぬれと青柳のいとはふりすも見ゆるいろかな

道をゆく人郭公をきく

打はへてまちくるみちのほとゝきすたゝひと聲やきゝてやみなん

神まつる所卯の花さきたり

いのるをもきくたよりには卯の花のさかりをさへや神はみるらん

はつ雁をたひ人きく

はつかりのたひの空なるこゑきけは我身をたきてあはれなるかな

もみち葉うきてなかる

もみち葉もたちつもりぬるやり水は秋のふかきもそらに見えけり

かくらしたる所

さよふかく霜はたくともやまひとのをれるさかきの色はかはらし

たかき山に雪ふれる所

たきの糸はみなこちつらん吉野山ゆきのたかさにたこをかへつゝ

御屏風に松に藤かゝれり

いさかくてかゝれる藤はさしなから松にこゝろはたかはさりけり

梅

あかさらは千世までかさせ梅の花はなもかはらてはるもたえすは

道行人郭公きく

ゆく道もはるけきものをほとゝきす聲にこゝろのとまりぬるかな

六月はらへする所

君かためいのるこゝろを見し神もなかるゝこゝくけふや知るらん

せさいうゑたる家

つゆをたにたこきてをりつ女郎花うゑはいつれのあきか見さらん

御屏風に秋野の花みる

花のいろのあかぬかきりしかへらすは宿とも秋の野邊やなりなん

御屏風に池のほとりの柳

みなそこにかけのうつれる青柳はなみのよりけるあわとこそ見れ

浦ちかくたちつる秋のかすみとやくしほかまのけふりをそみる

よこゝもにもしほたれつゝたかためにも火にもみつにもいれる心そ

卯の花のさかりにのみややまかつのかきねもしるく人はみるらん

かくら

年をへてかみをそいのるさかき葉の色もかはらて祈らんと思へは

たかうな祈る所

つちわくる春にて見れはくれ竹のこもれるよゝのほとも知られす

新敕　ふく風のみたれる岸のあをやきはいとゝなみさへをれはなりけり
まつの下水やれり
いにしへの心もたえすゆくみつにわかかけに◯◯けふこそはみれ
はう上の右大臣殿御賀中宮のし給ふにむらかみの先
帝めすにこうはい
ふく風ににほひかはらぬ梅の花たかそめつけしいろにかあるらん
子の日
みなそこに色もかはらぬこまつ原ちとせ千代そふのへにきにけり
きしちかきまつにかゝれる藤波ははるの名こりにたちとまらなん
山さくら人しらねともきにたきのそこなる花やなかれいてぬらん

すみよしのきしの藤なみ春ふかみいくしほにかはいろまさるらん
五月雨のよもあけかたきなけきかな物思ふことやかみとなるらん
さは水にかけのかたふく（あをやイ）やまふきはかはつの聲をあはれとやきく
やまふきの花のさかりにかはつなく井手にや春のたちとまるらん
しら波のをるかと見えてをちかたのきしのまに〳〵さける卯の花
かたをかのみかきか原のうくひすは花ちりぬとや音をはなくらん
みつあきらの少將のもとに歌合するに夜の梅
にほふかのしるへならすは梅の花くらふやまにもをりまとはまし
やなき
くり返しとしへてみれと青柳のいとはふりせぬものにそありける
たなし少將のむすめのもゝかの夜子の日にあたりて
けるに一條の左大殿のものなとたてまつらるゝに

春さむみそらのけしきはつゝめとも今日の小松はなほそひきつる

すさく院の御時に若菜めす

いまさらに老のたもとに春日野のひとわらへなるわかなつむかな

御賀して正月七日ひけこに若菜いれて少将をつかひ
にてたてまつる

春日野にたほくの年はつみつれとおいせぬものはわか菜なりけり

御返し

年つめとたなしさまなる若菜にもけふたにすやあらんとすらん

女一宮の御五日にすはまなこしてたてまつらせ給ふ
に

波たてゝたつのかけさへ見ゆるかな千世の数そふしるしなるへし

みなそこにかけを見せつゝ芦鶴もきみにはちよも（をィ）へたてさりけり

雲居にて君をみるへきたつなれはちよもいとこそはるけかりけれ

人のうふやの七夜

千世まてもきみありそ海のかけ見れは小松もいまそ生ひはしめける

物へゆく人につるのかたをぬさにして

きみかゆくゆくもちたくれぬ芦鶴はいのるこゝろのしるへなりけり

秋ものへゆく人に

風よりもたむけにちらせもみち葉も秋のわかれは君にやはあらぬ

さぬきにてかけあきら

もみち葉の錦に見ゆるうらうらはなみのあやをやたちかさぬらん

返し

色ふかき紅葉そめけんうらうらはみちこししほのかすやましけん

たいにのくたるに

たいぬれと猶ゆくさきそいのらるゝちとせまてにもいきの松はら

風ふく日ものへゆく人に

風ふけはたもほゆるかなすみよし（のえイ）の岸のなみにもあらぬきみさへ

みのへゆく人に

時のまもあまたゝひのみかなしきは君かゆくへき道にそありける

物へゆくにあめふるとてとまる人

なくなみたそらにみてはや大空にけふしもあめの降りてとめつる

返し

こきませてなみたも雨も降りつるにいつれによりて君とまるらん

こしへゆく人にあふきやるとて

しら山のゆきのなこりはさむくともかたみの風はあふきつゝゆけ

ものへゆく人にまくらとらすとて

わかるらん人のこゝろはこれをさへあたなる草のまくらと思ふな

こしへゆく人に

しらやまに雪ふりしきてさむくともたえすあふきの風をわするな

したかふの朝臣のとのかみにてくたるに

ゆきふかく春とも知らぬこしちにもをりし梅こそはなは咲きけれ

返し

梅のはないろはゆきにもかよふなりかへる山まてきみはとはなん

またかへし

いつはたとまつほとすきは白山のゆきまのあとをたつねさらめや

ふこのかみのめにてくたれる人のまたちくこのにて

ゆくにやる

別れゆく君かたむけのいのりにときにしみち（へイ）にもゆくこゝろかな

手にかゝるあふきの風をそふるかな船路をゆかむきみかためこて

ゑにあれたるいへにしくれふるをこゝ來たり

かみなつきそらの時雨もふるさこに君たつねつるそてもかわかす

ほうしふかき山に居たる

跡たえていりにし日よりよし野山たきのたこにもひこのきこえぬ

人の家よりたきなかれたりうまひきこふめたるを

こゝあり

いかてかはすきてゆくらん河波のたきこまちるゝやこのはなより

たひゆく人ありかりなく

ゆくひこにそふる心のあやしくも知るへなきこゝまこひぬるかな

ゆくをたゝ思ひやらなんかりかねのかへる聲たにきかぬくも居を

たつこきくそらをなかめてはる霞かりのわかれそはかなかりける

あさりしたる所

あさりしてかひありけりこ思ふ身を恨みてふるこひこや見るらん

身をすてゝそこかは今もたくなはをなかくくる人あらしこそ思ふ

あれたる人の家のうちに紅葉ちり入りたる所

そらみえてかけもかくれぬ古里はもみちさへにそこまらさりける

たなはたのゑに

さよふけて今わたるらしあまのかはかけこそみえね水まさるらし

中宮のひゝなあはせにかはらのかたすはまにつくれ

りひゝなのくるまのかた七月七日

たなはたも今日は逢瀬こきくものをかはこはかりや見て歸るらん

れいけいてんの女御中宮にたてまつれたまふひゝな

のもにあしてにて

しら波にそひてそあきはたちぬらしみきはの声もそよこいふなり
たなはたのこゝろや空にかよふらし（んィ）けふたちわたるあまの河きり
三條女御なてしこあはせし給ふに
あしたつのをれる濱邊のなてしこはちよをや色もひに（きィ）はそむ（ふィ）らん
かきほなるやまこなてしこ色ふかきけふやこふてふ人をまたまし
なてしこの花のかけみる河なみはいつれのかたにこゝろよすらん
なてしこのはな咲きそむる夏の野にけふひくらしの聲のきこゆる
村上天皇の御時に（のィ）菊あはせにすはまにつる菊あり
たつのすむみきはのきくは白波のをれこつきせぬい（かけィ）ろそ見えける
たなし御時御前に紅梅うゑさせたまひて鶯のすなこ
つくらせたまへるにめしに
うくひすのうつれる宿の梅のはな香をしるへにてひこはこはなん

きたの宮のうちにたてまつれ給ふ御あふきに
君か手にまかするあきの風なれはなひかぬいろはあらしこそ思ふ
そてのうらのなみふきかへす秋風はくものうへまて凉しからなん
七月七日一品宮の御このかけ物こうの中將のたてま
つるあしてに
拾 あまの川かはへすゝしきたなはたにあふきの風をなほやかさまし
春宮の殿上人あふきたてまつるに
こよなくもけふは凉しきたもこゆゑあふく風さへあきになりつゝ
中宮の御さうしかゝせ給ひけるたくにたまさゝの葉
わけにやこる露はかりこいふここかきてまゐらせた
りけれは宮より
見れこなほ野邊にかれせぬたま笹の葉わけの露はいつもたえせし

御返し
消えぬまをうきことにする玉さゝのつゆは風まつほとそあやしき
ほりかはの中宮のゐんふたきのところにめしたりけ
るに
なつ山のしけりをわけてなく鹿をいかてともしのひとたつぬらん
こいせのうたかきて人につかはすに
新敷
なき人のことの葉うつすみつくきはかきもやられす袖そぬれける
人のさうしかゝせけるたくに
我よりはひさしかるへきあとなれとしのはぬ人はあはれとも見し
むらかみのてんわうの御時にいれもしのたほせこと
ありて上たきといふもしもあわといふことをいれさ
せ給ふ

世々をへてたちくるたきのしら糸にぬける玉とはあわや見ゆらん
つきもせすたちくる瀧のしらいともむすひし泡やかすもしるらん
たけ
ゆきたもみ抜はなひけとくれ竹のしたにかはらぬよとそ見えけれ
みやの御もきのうたよみてたてまつりしをみたまひ
て　右大将
よし野山たきのいと（しらいとィ）さへとちつれとはやくゆき（しりィ）にし聲はわすれす
みしかききやうをねこめにひきて女三宮より
つゆしけきあさちか原のはなれとみしかきほとに秋を知るかな
御返し
あさちふのしたにさきたる花の色は蟲のねとこにたれかひきけん
知りたる人のはやういきしところにまたいきけるに

見る人のそてのあやし（なイ）くぬらすかな野中のみつのふかきはかりに

かへるのかれたるを人のおこせて

かれにけるかはつの聲を春たちてなとかなかぬとおもひけるかな

返し

誰かかくからをおきてはしのふらんよみかへるてふ名をや頼みし

はやうすみし家のさくらを人

年をへてすみけん人もとはなくにはるをすくさぬはなを見よきみ

かへし

あけくれにさはぬはかりそ玉くしけそこなる花はいつかわするゝ

さくらの又はえしたる枝のあかきにつけて

春すきて秋はまたこぬほとなれははなかもみちかえこそ見（さためイ）わかね

又ひと

あふと見し夢をたのみて春の日のくれかたきをもなけきつるかな

といへる返し

こゝろしてあらましものを夢にてもいかておもなく見え渡りけん

又人

たのめともむなしき空をなかめつゝしのひに袖のぬれぬ日そなき

返し

あはれとも思ふこゝろのそらなるはなかむと人もきけはなりけり

五月まゆみのもみちにつけて大納言

時雨をはまちもつけてや山のはのおのれまたきにもみちそめけん

返し

まちかねてうつろふ枝のあたりには人に知られぬあきや來ぬらん

またひと

君こふるなみたもそてにもりぬれは我よりほかのひこや知るらん
返し
わかこふる涙ならて（からイ）も身にそひてうしろめたくももらすなるかな
又人
身のうへもひこの心も知らぬまはこさそこをなき音をのみそなく
返し
君たにもここそこ知らぬ涙をはいかにしりてかあはれこたもはん
又ひさ
（後）はかなくてたなし心になりにしをたもふかここ（くイ）はたもふらんやそ
かへし
わひしさをたなしこゝろこきくからに我身をすてゝ君そかなしき
又人

か（さイ）は水のこゝろを知れる君ならはつねよりまさる今日をこはなん
返し
まさるらんみきはのほこは知らねこもよこむ濱邊そ思ひいてつる
たもふ事ある比
あるよりもみたれまさりて蛩のかるものたもひすこ君はしるや（らすやイ）は
ある人
かくしつゝ世をやつくさんみちのくのあふくま川をいかて渡らん
返し
あふくまをわたりもはてぬ物ならはかはなか〳〵に我いかにせん
きたるにかへしたれはまたひこ
あき風になひくこゝろは葛の葉の吹きかへさるゝをりそわひしき
かへし

こゝろよりふくにもあらぬ秋風にかへるくす葉のうらみさらなん

又人櫻を折りて

人知れぬわか身ならすはやとなから花見にもこといはましものを

返し

花見にといひかてらにて人知れす折るともかせにちらさすもかな

ある人のしのひてものいふほとに郭公のなけは

こよひこそしての田をさもきゝつなれ今やさつきの空に知られん

返し

ほとゝきすきゝわたるとも五月雨のそらことに人はなさなん

かたらふ人の物いひて

うつゝとも夢ともわかてあけぬるをいつれのよにか又はみるへき

返し

ゆめにてもたれもひしわかぬ物なれは見てわすれなんとの佗しさ

又ひとに

うつゝにはこゝろもこゝろねぬるよの夢ともゆめと人にかたるな

ことをかりて

こしをへて音にきゝつることの音を手にならしつる秋そうれしき

かへし

音にのみきゝけることにたとれはやならしそむるに秋のそふらん

かたゝかへに人の家にいきてかへりてつとめて萩に

あさかほのかゝれるを折りてかれより

はつあきのはきのあさかほ朝ほらけわかれし人のそてかとそ見る

返し

そての色も見えやはしけん朝顔のひるうつろひしわかれならぬに

よへの月は見けんやと人のいへるに

新古 いつとてもあはれと思ふをねぬる夜の月はおほろけなく〳〵そみし

人のこんといひて來ぬに

ちきりけむ日をもすくさぬ七夕はわかことかくもたもはさるらん

かへし

たなはたに契（のイ）りけん日はすきぬ（くすイ）ともたとふへしやは事もゆゝしく

また

ゆゝしともたもはさりけりたなはたの忘れぬ中のあらまほしさに

あきころ月のあかきに人

拾 こひしさはたなしこゝろにあらすともこよひの月を君見さらめや

返し

拾 さやかにも見るへき月を我はたゝなみたにくもるをりそたはかる

年ころありてきてかへりて人

拾 ころもたにへたてしよひはうかりしを簾のうちのこゑそこひしき

返し

拾 うちとなくなりもしなまし玉すたれたれとし月をへたてそめけん

また人

時雨にもつゆにもあらて君こふるわかころも手のぬるゝころかな

かへし

こさまさる紅葉ならねはぬるらめと色のふかさも知られさりけり

秋風いたうふく日

萩の葉のいろつくたにもあるものをこゝろすこくも風のふくかな

かへし

いねかてになりゆくころの風の音は萩の葉ならぬ身にもしみけり

たれにかあらん又人

秋の夜の夢そと思はゝいたつらにゆきてかへるもうらみさらまし

返し

ゆきかへるみちも知ら（おくイ）れぬ心にてまた（とイ）ひと（しわイ）しれはたれをうらみん

雨降るに人のきたりしに

月見にもこぬよひあまたすきぬれは雨もよにこしと思ひけるかな

人に

そてしきてふしゝ枕をたもひいてゝ月見ることに音をのみそなく

七月八日

いむといへは忍ふものから夜もすから天の川こそうらやまれつれ

人

たかさこの尾上にたてる松をたにをれはをりつるわれと知らなん

返し

たかさこの松はをれとももしもかれにましれるしたを知る人そなき

かとさしていつみのかみしたかふのあそむかきをへたてゝあるに梅をこなたの人いりてとりたりといふをきゝてうめをやりたれはしたかふ

ゐせきにもさはらす水のもるときはまへのうめさへ殘らさりけり

かへし

ゐせきにもさはらていかてもりつら（にけイ）んす（せイ）きのふるこ（くイ）ひこひもあへ（かイ）ぬに

またしたかふ

いつみにもあら（はイ）ぬまかきの島ちかみ波のこえつゝもるとこそきけ

またかへし

うちこゆる波の音せはもらぬよりしまきの風そふきかへさるゝ

また人

花をこそ人や折るとてとかめしかかすならぬ身をいかにかはせん

みつあきらの少将に

こたかくて雨もさはらぬみかさ山かけにかくれぬひとはあらしを

おなし所にてかけあきら紅梅（こィ）を折りて

つねにかくうらみてすこす春なれは梅にはこりすのちもまたれん

返し

たちてぬる春とそきゝしはるかすみかくまて梅に折らるへしやは

又たれにかあらん

おもふとちまとゐてをれは梅の花こゝろにくゝやふかく見ゆらん

おなし少将の家にて二月十五日に月のあかきに少将

春の夜のよひ居なからもなからへんこおもふ心もいのちなかく（たえすィ）は

かへし

このはるをのふるこゝろのはしめにて千世すくるまて思ふやは君

人にかはりてある女みつあきらの少将に

いかにせんたえまかちなる岩はしをたのみわたらん事のかたさよ

かへし

かつらきのつらきくめちのいははしのそなたもたゆる心とそきく

またかへし

こゝつくる君かつらきの神よりもたえまはわれそわたしわつらふ

又かへし

絶間なくわたさましかはかつらきのかみのとけてそ我たのまゝし

人にかはりて

おころかてあらましものを見もはてぬひるまの夢の戀しかるらん

ものへまかる人にあふきやるとて

きみかゆく船路にそふるあふきにはこゝろにかなふ風そふきける

又人のれうに

まつほとのとほたふみこそわひしけれなこその關にいまはさはらし

あめふる夜人と物なといひてねぬるをたもふ人にかはりて

をやみせぬ雨にしをれてとこなつの今宵ふしぬときくはまことか

七月七日

ほしまよふほとをまつとて七夕のやすきそらなきくも居なりけり

けふとみな知らぬ人なきたなはたの中さへさらによやふかすらん

こよひこそ風もすゝしくあまのかはなみたちわたる君をまちけれ

後

何事をたもふともなく夜もすからねぬにあけぬる夜をそうらむる

ぬるをりもなくてや床をあかすへき夢とたにこそつらきをは見め

かゝらんとたもはん程に夢路にもつらきこゝろは見えしとそ思ふ

よそにのみあふみのうみはかひなくて戀しき波そたちわたりける

かくて猶うきにいのちのたへたれは賴めぬ世まてまたんとそ思ふ

かひなくてあかしの浦のあきかせにこひしき浪そたちまさりける

秋風のふくをりにしも（につけてィ）とはぬかなをきの葉ならはたとはしてまし

つきかけのたなしいろなる梅の花いるともをりてみつへかりけり

あたにちる花うけなんと見るからにみつの上こそまついはれけれ

けふまてとなかれいてぬる水上のはなはきのふやちりはてにけん

戀しくはあらぬまてにもうれへつゝ人にいふへきことならぬかな

こし月のゆくらんかたもたもほえすあきはかりのみ人のみゆれは

こひしともいはゝすゝろにたもほえて人に知られぬねなくころ哉

ありしたにうかりし物をあかすとていつくにそふるつらさなるらん

とふことはいさや哀とたれもへともつらき（くイ）はいかゝ知られ（せイ）さるへき

うさまさるわか身と知らてよそにのみきゝし昔をかへしてしかな

まつ人の見えぬなからに（からにやイ）さよふけて月のいるにもねはなかるらん

見し人をみゆやと夢をたのむ夜はめもあひかたきものにさりける

いまはとてふりゆく花のふりな○は露たくにしもたかれさりけり

なかき夜をいかにあかして女郎花けさしも見れはつゆけかるらん

はるかなる山ならなくになつ蟲のそらにたくひと見えにけるかな

やまのはは池のそこにもみえなゝんいるとも月のかくれさるへく

うしと思ふ心のくまのなきときはつらさかくれぬものにさりける

人まつとなきつゝあかす夜な〳〵はいたつらねにもなりぬへき哉

日くるれはまつぬる萩はさを鹿のなくこゑにたにたとろきやせぬ

こひしきも心つからのこと（わさイ）なれはたきところなくもてそわつらふ

　　ひさしくわつらふころ

たくなはのなつの日くらしくるしくてなとかくなかき命なるらん

　　つきさわくころ

あまの原めつらしきことたほかりとよこそこの比さわくへらなれ

　　九月つこもり風ふく日

打すてゝわかるゝ秋のつらきよりいとゝ吹きそふ木からしのかせ

255
268

明治四十二年八月二十三日印刷
明治四十二年八月二十八日發行

編者　中川恭次郎
東京市本郷區龍岡町三十四番地

發行者　田中增藏
東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地

印刷者　今井甚太郎
東京市本郷區駒込千駄木林町百七十二番地

印刷所　歌學書院印刷部

發行所　歌書刊行會

發兌元　歌學書院
東京本郷區千駄木林町一七二
（電話下谷二七四五ノ甲）

終